

第六章 この十五年

一 野村館長から高村象平へ

野村館長の図書収集の方法は予算を無視した強引なやり方であったが、それを是認する財務理事が健在のうちには実行しえた。ところが、そうしたやり方に不快さを持つ人々もでてくる。野村館長が斯道文庫の寄贈を得て、塾内に研究所を設ける計画を商議会で発言したとき、商議員の一人は、物事はすべて総合的に計画をせねば駄目だと暗に反対の意見をのべた。昭和三十一年六月潮田塾長が退任して、奥井復太郎が塾長となり、町田義一郎・宮崎澄夫・松本正夫の三人が常任理事と決まり、あと二年にせまった創立満百年の式典と記念事業にとりくむことになり、翌三十二年に十二億円の資金募集が行われた。このうちの十億で戦災による施設の損害の完全な回復を目標したのである。一切をあげて建物の復興を、というのが新理事の念願である。それには経常予算はその限度内で賄われなければならない。ところが野村館長下の図書館の図書費は毎年予算外支出がかさむ。日吉図書館の新設にも既述のように苦情が出て、設計変更を余儀なくされる。斯道文庫も寄贈されるのはよいとしても、それを研究所に拡大しようと主張する。予算敲守を立て前とする新当局者にとって、野村の存在は事業遂行上の障害と映って来た。

折しも三十三年三月の館長改選の商議会がせまってきた。奥井塾長は野村より後輩であり、平生親交の間柄であつ

たので、この機会に円満に退任するよう、商議会開催の二日前に、自身わざわざ野村邸に出向いて、事情を詳しく説明した。野村は承諾したのである。そこで三月十三日の商議会の当局側からの推薦者はイロハ順で西脇順三郎、高村象平、小池隆一の三名で、この時は商議員から特に推薦者も出なかったので、上記三名について投票した。その結果は

高村象平 九票（十八票中）次点 西脇

であったが、投票中には推薦者以外の名前も入っていた。

館長の更迭は、野村にとって十一日奥井塾長から言われるまで予想もしていなかった。塾長も理事も自分より後輩であり、斯道文庫の受入れも多少の躊躇はあっても承認され、当座日吉の旧寄宿舎南寮を小改造して保管することになり、荷物の引き取りに阿部を九州福岡に三月三日に、上機嫌で送り出したばかりである。従って九州の阿部へ送った長文の手紙は、忿懣をぶちまけるといったものであった。しかし後任は高村だから変な真似はしないであらうから、辞めるなど追い書きしてあった。後任の高村もすぐ野村邸へ相談に行った。「自分の思うようにやれ」と言われたが、本心はそうでないことは顔に出していたとは、後年高村の語るころである。野村は図書館長の地位に気に入っていた。前に述べたように、何より本が好きだったので、自由に買える地位を手離したくなかったのである。しかし奥井塾長の懇請にあつて同意せざるを得なかった。そして館長の後任が、自分の弟子である高村に廻ったのは、せめてもの慰めとなつたかと思われる。

野村の退任によって館長の長期在任の時代が終つた。監督の田中は十六年、占部は二年だったが、其後の小泉も十

年、高橋も十年、野村は十四年在任した。しかし高村が三十三年四月就任してから、前原光雄、佐藤朔、高鳥正夫と続いて、四十五年三月、一応図書館が終焉するまで四代、平均すると三年である。これは偶然であろうか。いや、それは塾長の任期に関係がある。田中監督時代の塾長鎌田栄吉は在職二十四年、林毅陸が十年、小泉信三が十三年、潮田江次が九年、続く奥井復太郎は四年、高村象平が五年、永沢邦男が四年、大体において昭和三十年代以降更迭が頻繁である。塾長の更迭が館長の退任に結びつく。塾長の任期の短縮は戦前、戦後の詮衡方法の相違によると思われるが、その背後には私学の財政の不安定、更らには激動する社会にあることは否むことは出来まい。

高村館長の就任は三十三年四月で、退任は三十五年七月であるから、正味の在任は二年と三ヶ月である。就任に際しての言葉に、文字通り図らずもの選任であるだけに、吐露する抱負も持ち合せてはいないが、前館長が戦中、戦後の十四年間にわたってきずきあげられた運営方針がある。自分はその方針に添って、前館長の鴻業をけがすことのないように戒心して行きたい、と語っている。師に対する謙虚な言葉であるが、野村館長が中途で放棄させられた仕事の継続は完遂されたといつて良い。前館長退任の挨拶に「ただ私として非常に残念であり、且つ亦、後に来る人に非常にお気毒と思いますのは、御承知の図書館の増設ということ、書庫が一杯であるのに一向増設をやってくれない。せめてこれだけは私が自分でやって後へ譲りたいと思っておったんでありますが、甚だ微力で遂にこれを成就することが出来ない。但し、これは遺言として後へ残す、理事は遺言を尊重するだろうと思います。しかしその他の点において、実は今、いろいろな中途半端な仕事が沢山ありまして、工学部関係、日吉関係、非常に厄介な仕事を実は残してしまつたのです。」と色々いわれているが最大の難問題は図書館の増設ということであつた。

野村館長は大図書館の建設の希望を持ち続けた。今の図書館は明治時代に創設した建物を、単に復旧したにすぎない。近代施設にするには新しい図書館を建て、今の図書館は福沢記念館乃至考古学陳列室として博物館的なものにするればよい。大図書館の敷地は現在の南校舎の建っている場所が当時は焼け跡の広場であったので、其処か、或は伊太利大使館の区画と考えられていた。当時伊太利大使館はもし適当な代替地があれば、慶應義塾に譲渡してもよいとの意向があった。商議会は二十五年以来年一回乃至二回開かれたが、その度に繰返される問題はこれで、百年記念事業として最適だから是非実現するようにと激励されたり、或はアメリカの財団の援助を求められないかを討議したりした。結局は財政の問題で理事の承諾を得ることが出来ず、妥協として百年記念事業募金十二億円から、四千万円をさき、現在の図書館に書庫一棟を増加することになった。一時糊塗的な増しには大不満であったが、それとも中々着工されない。初めには予期しなかった日吉図書館の方が先きに手をつけられたのに、本塾図書館はその儘、放任された。図書を買っても、寄贈されても入れるべき書庫のスペースもない。日吉の図書館が出来たら星文庫か、小山内文庫を移そうかなど考えられ、商議員の反対を買ったりした。そうした状況で高村館長に引継がれた。

当局側には当局側の理由がある。記念建設事業にも着工の順位があつて延ばされたことであるが、高村館長時代になつてのことだが、若しかしたらアメリカから資金の援助が期待出来るかも知れない希望が一時でたことがあつた。三十三年末から翌年一月にかけてフルブライトの訪問教授として来塾したイリノイ大学教授マックス・フィッシュが、慶應義塾図書館の古くして狭隘なのを見て、全然新たな別種の図書館を建てる必要を力説し、永い伝統と開放的である慶應義塾に対しては、アメリカの財団から寄附を得る見込みがあることを語った。その話を教授沢田允茂

も聞き、別の席で清岡暎一も聞いた。そして兩人から松本正夫理事に語られた。乗り気になった松本理事は三十四年三月新図書館建設委員会を発足させ、その下に専門委員会をつくって、四月十三日に米国図書館協会の国際部長ジャック・ダルトンの来塾予定があったので、それに間に合わせるよう、突貫工事的に計画の骨子を作った。専門委員会は三月七日に初会合して、松本・清岡の二人から趣旨の説明があり、文経法商の各学部から二名宛、図書館学科から四名、図書館から三名、計十五名に工務課員一名を加えて、四月三日最終草案を書上げ、六日建設委員会の承認を得た。

その要旨は、新図書館は今の図書館の増・改築にあるのではなく、新しく建てられるもので、その際、今迄の図書館は新図書館と関連して機能を發揮させるよう考える。新図書館は従来、ややともすれば研究・調査及び教育機能に効果的に結びつかない点があったのを是正し、一施設内において両機能が有効的に發揮されうるよう考える。蔵書数は将来二十五年を見越して二百万冊、利用対象数は教員千、学生一万五千、敷地は八五〇坪、該敷地内に約六千延坪の建設が可能であるとして、

- A 研究のための施設（個人研究室、大学院研究室、共同研究室、資料室、会議室、教員室）
所要坪数 一一、一〇〇坪
座席数 一、五〇〇席
- B 学習読書のための施設
所要坪数 二二、三〇〇坪
- C 資料の管理・保存・利用のための施設（管理部門、受入整理部門、奉仕部門、特殊資料部門、特殊コレクション部門）
所要坪数 二二、三〇〇坪

D 図書館学研究室（図書館学科・ライブラリーセンター）

所要坪数 四六〇坪

総所要坪数 約五、八六〇坪

費用は A 坪当り十五万円

八七、九〇〇万円

B 冷暖房設備（換気・除・吸湿装置を含む）

坪当り四万円 二四、〇〇〇万円

総計費用

一一一、九〇〇万円

建物は現在の研究・教育情報センターの場所で、鍵形に折りまがって医務室・食堂のあたりに突出し、五階層の図面も出来た。

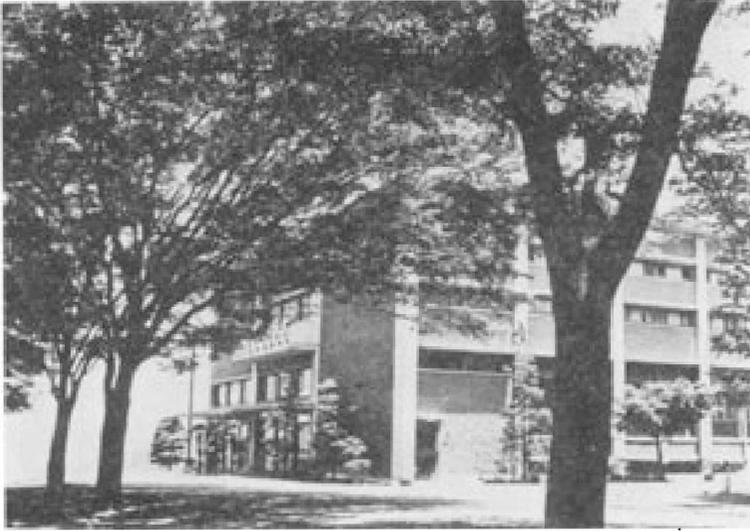
専門委員中、多く発言したのは福岡正夫、鈴木孝夫、田口精一の各教授、図書館学科では藤川正信、沢本孝久、図書館では伊東弥之助、石川博道、笠野滋らであった。四月十三日、待望のダルトン国際部長が来塾したが、成功しなかった。ダルトンの意見は図書館の建設には研究者、利用者の要求の調査や、学校の教育方法に見合った建て方の研究など、少くとも十年の歳月を要する。僅かな検討で好しとすべきではないということであって、道理からいえば全くその通りで、聞く側にとって赤面するばかりであった。

以上のようなハプニングがあつて、アメリカの援助も期待出来ないとなると、理事もかねての約束の四千万円増築に本腰を入れるようになり、三十四年八月六日、増築に対する図書館の希望を書類で求めた。八月十四日提出された「増築書庫に対する答申書」の要旨は義塾の発展と今後の学界の研究規模の拡大を考へるとき、単なる書庫のみの増築では学者の研究、学生の閲覧を満足させることも、図書館自体の運営を円滑ならしめることも出来ないから、書庫

だけでなく、本館の改造と見合つた増築計画を希望したい。そしてその基本条項として閲覧座席数を現在の二二四席から三五〇席に増加する。稀覯書庫とその閲覧室に三〇坪、視聴覚資料室に二〇坪、雜誌室、レファレンス室四〇坪、学生指定図書室三〇坪、書庫内に教員用キャレル。それに事務室の拡大、若し記念室を事務室に転用出来れば学生の熱望する学生出入口を地階からでなく、一階玄関からとすることが出来る。以上のような基本条項に従つて当局の五〇坪六階建（総計三〇〇坪）の書庫増設というのでなく、一〇〇坪四階建（将来は六階建となし得るよう設計）のものを図書館の背面に建て、広い廊下によつて密接に連結し得るよう、簡単な図面を添えて提出した。

答申はこの春、松本理事を中心に企劃された新図書館計画案に比較すると、如何にかけ離れた貧しいものであつたかが、すぐわかるであらう。しかしこれでも財務理事の承諾するところとはならなかつた。答申に対して工務課員三菅正光が伊東と接衝を重ねた。地震などを考慮して接統面を特に苦心し、工務課が三案設計したが、どれも許可されなかつた。十二月には三菱地所部が加わつて設計したが、建設場所の地盤は十四、五米までは不安定ということもあつて、見積価格は六千九百万円と当初の四千万円予定を遙かに越えた。三十五年六月二十二日前館長野村兼太郎が死去した翌日、驚いて駈つけようとする柄沢、伊東は管財部長福田与志三郎につかまつて、輪郭を小さくするようにという町田理事の意見と共に、大鈍を加えて呉れという福田の希望を聞いたのであつた。この六月、塾長交迭があつて、高村館長時代に増築建物は遂に立たなかつたが、次期塾長に高村がなつたので、要望通りの増築を完成させることが出来たのである。

野村前館長の退任の挨拶の中で、やり残した仕事のうちの工学部関係というのは兼々工学部図書室を本館の分室に



藤山記念日吉図書館

しようという工学部側の希望があった。分室にすることによって金の問題も、経営も本館の援助を得られると考えたらしい。高村就任と同時にその希望は適えられたが、図書費の増額、増築計画など口添えは出来ても、本館予算を裂くわけに行かないので実現しなかった。ただ人事の面では藤山工業図書館の主任司書であった安食高武が転任して強化された。しかしこれも鼻っ柱の強い安食は教員と折合わず結果においては失敗した。

又、日吉関係とは差当っては斯道文庫の取扱いであろう。野村・高村の交迭時期に阿部は九州大学文学部に寄託されていた七万冊の図書を引取りに行っていた。図書が日吉に着いたのは四月十四日、旧寄宿舎南寮に納められ、六月十六日旧蔵者麻生太賀吉ら関係者を招待して、披露パーティーを催し、七月より公開した。係員は当初阿部の外、元北里医学図書館主任司書であった佐野輝夫が就任した。

三十三年一月に着工された日吉図書館が落成したのは八月

九日であった。工費は三十二年七月に売却された藤山工業図書館の資金で賄われたので、「藤山記念日吉図書館」と命名された。それまでの日吉図書館は本館の分室であったが、この時から分館となり、副館長は小松房三が引続いて執務をとった。

野村館長時代に計画され、高村時代に出来たものに「慶應義塾図書館蔵和漢書善本解題」がある。義塾の創立百年記念出版の一つで、内容は天平写経以降慶長末までの古写本、奈良朝以降慶長期にいたる古板本と宋代から明代にかけての古刊本の解題で終り、慶長以降の写本、版本及び近世名家の自筆稿本、書入本等は経費の関係で省かれた。執筆は司書阿部隆一が担当した。図書の選択に或は異論があり、解題としての記述の範囲を問題とする人もあったが、書誌学的記述の正確さと学術研究に資するよう視界を拡げた編纂方法、加うるに阿部の熱っぽい記述は、この種のものに類を見ない特色あるものとして好評であり、三十五年六月第二十一回私立大学図書館総大会で、私立大学図書館協会賞が阿部に授与された。

二 高村館長の構想

ここで新館長高村象平の履歴を語って置こう。明治三十八年八月に東京本所で生まれ、東京開成中学から慶大予科本科を経て、昭和四年に経済学部を卒業し、助手となり、昭和十年の春から主として独逸に留学し、アメリカを経て、十二年春帰国して助教授、二年後に教授に昇進した。昭和三十年経済学部長を経て図書館長になった。専攻は西洋経済史であった。大学卒業直後は英国の児童労働史を研究していたが、恩師の野村兼太郎から独逸のハンザ同盟の

研究をすすめられて、それが専門になり、それで学位をとった。研究分野に発展性のあるものもないものがある。世の経済史、特に独逸・ハンザのようなものは地味であり、縁の下の力持ちみたいな仕事で、のびない部類に属するものを永年こつこつと手懸けた。縁の下の力持ちみたいで、こつこつ手懸けるといふことは図書館の仕事に通ずる。そして亦、歴史学の研究には広い視野に立って、広い範囲の図書資料への注意が必要である。その点で図書館長はうってつけであった。高村の語るところによると、その頃教科書選定の委員などもしていたが、それも選書方針決定には役立ったと言っている。

館長に就任したときはあまり突然だったので、何の抱負も持たなかったというが、其後の実績は短期の在任の割りには充実している。「私は何をやっても先生(野村)には及びもつかない」は毎度口に出す言葉であったが、図書館の仕事のうち、運営面では野村よりも活動的であった。野村は図書の収集では大図書館長に倅した。又、慶應義塾内の



高村象平

図書館網に統一をつけようとする構想は大きく雄大であったが、さてそれを実際に緊密化しようとか、図書館内の運営などという事務的な、或は人との接衝的な仕事は不得手で部下まかせであった。野村は部下の報告に頷いたり、否定のときは大きな眼をギョロつとさせて首を振った。書庫へ入ったのは数える程しかない。目録も自分ではあまりひかない。館長の椅子にどっかと腰を下ろして、大図書館を築いたのであった。ところが高村館長はこまめに動いた。他の部処との接触

も、部下の進言も良く聞き、図書館内も前館長よりはるかに多く巡見した。就任して間もなく、高村館長は柄沢副館長と不和になった。館長交迭の翌日、柄沢は留任を求められ、緊密に補佐出来るよう、部屋を同じくし机を並べて仲良く発足した。柄沢は卒業年度からも、図書館の経歴からも高村より先輩であったので、初めは大いに新館長を啓蒙して仕事をしようと張り切っていたが、数ヶ月足らずで二人は仲違いした。性格があまりにかけ離れていたと言いが無い。結局、高村館長は陣頭に立たざるを得なくなった。

高村館長の収書に対する当初の構想は商議会員の協力に頼ろうとしたようであったが、それは出来なかった。就任して間もなく、文経法商の三田だけの商議会を開催して、図書館の収書費の実状を述べ、図書館の蔵書構成を型作る選書に対する援助を懇請した。図書館では基本的な定本になる収書は、館長とその補佐の館員で選定するが、教員の推薦による収書の購入も多額にのぼっている。従来は教員の推薦は個々の人が申出たため、特に熱心な人の請求だけで予算を費やし、蔵書が片寄る傾向があった。その是正のために教員の推薦は商議員の口を通して貰いたい。そして又、特に高額なる収書の購入決定には商議員の判断に俟ちたいと諮ったが、商議員各員の渋るところとなって実行されなかった。例えば其時、文学部の教授からアリストテレス学会の会報、エドモンド・フッセル関係の収書及びキヤプテン・クックの航海記の仏語版の三つの購入が求められていたが、その選定に意見を求めると、文学部の商議員はそれぞれ推薦教員から伝言を受けており、実際のところ専攻外なので審査を求められても、その軽重は定められないといつて拒んだ。かくて教員の推薦書は各学部別に割当てた予算の枠内で、研究室の収書委員長を経て申出るよう変更された。

五月には図書館と三田研究室との間に懇談会が持たれて、従来研究室の図書は図書館の管掌下にあつて、研究室購入の図書も図書館備付の台帳に記され、購入伝票には各学部 of 学部長の承認と共に、図書館長の認印も必要であつた。その煩雑さが研究室の図書整理を遅らせると言われていたので、館長の認印をやめ、その変り購入書の目録カードの写し一枚を図書館に貰い、それで図書館月報に研究室図書を掲載することになった。又、図書館、研究室の重複購入をなるべく避けるため、双方で購入図書リストを作成し、交換して選書の参考資料とすることに決めた。

さらに図書館と研究室との緊密化を図つて、図書収集の分担や保管の転換などを計画した。図書館と研究室の双方に収蔵されている雑誌類はどちらか一つに定め、或は一部分づつ双方に持っているものは、どちらかに移籍して一箇所に纏め、研究者の便を図る。館長は学部の図書委員長と直接協議してその実現を説得した。三十三年度末に統計年鑑及び統計関係雑誌、さらには国連出版物について懇談が持たれ、統計年鑑については英米仏独露のもの of 主要なる一冊は図書館が収蔵し、その他の国は研究室が備える。そして相互の欠本は移籍をも含めて完本にする。雑誌の購入分担も決める。国連出版物は予算上、限定されざるを得ない。ILO、FAOの年鑑各一種、ECE、ECAFE、ECLAの経済年報各一種、世界経済研究と世界経済報告は図書館で継続する。単行書は双方所蔵一覧表を作つて、研究者本位にその希望に従つて配置替えを辞さないと協定した。又、法学部の米法関係の図書の不備を是正するため、研究室の *Corpus juris scandinavum* を図書館に移籍し、欠本は図書館で補い完本とした。U. S. Code Annotated は研究室が文部省助成金で購入し、アメリカン・ロー・レポートやアメリカン・ユリスプルーデンスなどは図書館で一括購入し、二年契約で研究室に貸出すと定めた。文学部関係は十三教室に別れ、統一的な購入委員会がないため、そう

した協定が出来なかったが、図書の配架の狭隘さから図書館に移管されるものがあつた。助成金購入によるチャーター協会の出版物の揃などそれである。

研究者用の施設としてマイクロ・リーダー及びキャビネットを拡充し、新設して大部のもののフィルム利用を図つた。折から国会図書館春秋会発行の節用集、連珠合璧集など一連の記録類が売出されたので、それらを備付けると共に、石川忠雄教授による中国共産党関係の複写も取められ、又洋雑誌インターナショナル・プレス・コレスボンデント、ビジネス・ヒストリー・レビューなどの全巻を手始めに、紐育タイムスも一九六〇年からフィルム版を購入することになった。

高村館長は研究室と緊密さを保ち、研究者本位が強く打ち出されたが、学生に対しても積極的に便宜を図るよう努めた。その第一着手は戦後初めての図書の館外貸出の実行であつた。夏期休暇中の、それも通信教育部学生の夏期スクーリングの利用便宜のために、通信学生が比較利用しまいと考えられた、洋書と漢籍に限ってだけであつたが、貸出された。帯出を許される学生は大学院修工課程の学生と大学部四学年生及び通信教育部の通年スクーリング学生に限り、期間は七月五日より九月十五日迄、帯出冊数は一人二部四冊とし、手続は先づ館外帯出証を求め、それに指導教授のサインと認印をうけて、借用出来るといふややくしきで、三十四年から実施された。その対象学生数は千八百八十四名であつた。図書の館外貸出は戦前は卒業論文作成の学生にのみ実行されていたが、戦後図書欠乏の混乱せる世情を考へて途絶えていた。この時から模索的に復活したのである。

図書館における展覧会は前館長時代に引きつづいて、三十三年五月に日本中世文学資料展、同六月に斯道文庫善本

展、三十四年一月に亀井南冥・昭陽著作展が開催されたが、学生のための啓蒙的な展示を常に行う計画が立てられた。展示ケース二台が閲覧室入口に定置され、二週間毎に内容が変更された。館長が特に希望するところは福沢諭吉に関する展示を多くして、学生に義塾創立者の知識と精神とを多く注入したいということで、その第一回は三十五年五月、日米修好百年に当るので福沢諭吉最初の渡航、「咸臨丸」に関する資料の展示で初まった。小さなケースであるから多くのものは飾れないが、咸臨丸の航海図や乗組員の写真、米国からの土産品、渡航に関する瓦版などが並べられた。この展観は四十四年六月まで百二十三回に渡って続けられた。最初と終りの十回分の題名を記してその傾向を示す。「咸臨丸」の次は「明治初期の新聞」「大島圭介宛書翰」「日本の発見」「絵巻物」「演説の初め」「広重」「明治の社会主義新聞」「歌舞伎」「帳合の法」と続き、終りの方は「丸岡明を偲ぶ」「ルーマニアの美術」「和菓子」「ゴリキー生誕百年」「福沢屋諭吉と丸屋善八」「篆刻」「物故教授の遺著」「ニュージールランド」「蒸汽機関車」「佐藤塾長の著訳書」であった。小展示ではあったが反響は大きく、「ヨネ野口」の展示の時には偶々慶應に英国の桂冠詩人ブランデンが来て、わざわざ立寄って喜んで呉れ、又、生誕百年記念のイエーツの展示には、学生から聞いたといつて早稲田の教授が見に来て、イエーツ学会に報告されたそである。或は三田新聞で予告を見たといつて、遠く離れた卒業生から参観が出来ないのを残念がる手紙を貰ったりした。

高村館長が学生に対する施策中で最も力を入れたのは座席数の増加を求めたことにあつたらう。高村が後年回想しているが、昭和三十二年が慶應義塾の一つの転機であつた。戦後のマンモス私立大学の間にあつて、慶應はひとり伝統を守つて比較的學生も少数であつた。しかし経営難から學生数の増大に踏み切つたのはこの年である。商学部が増

設され、大学院が拡大され、各学部 of 学生数も増加し、それに対応して三田にも南校舎、西校舎、日吉にも新校舎が次々と増設されたが、図書館はその儘であった。明治以来の閲覧室は座席の間隔を狭めて、収容人員を増やしてもたかが知れている。どうしても増設せざるを得ない。前節に述べたように、米国のフィッシュ教授示唆による新図書館の建設には、高村館長の見通しは聞く消極的であったが、創立百年記念事業に組みこまれた書庫の増設には積極的であった。そして書庫だけの増設でなく、閲覧座席数の増加が見込まれるよう働きかけた。この必要は充分認められながらも、高村在任期間中に出来なかつたことは前述したとおりである。

館内施設の小改善には真空消毒器の導入がある。図書を虫害から守るために戦前は書庫を密閉して、ホルマリン燻蒸を年一回行つたが、戦後は書庫の痛みから不可能になつて、特に虫害にひどいものは茶箱に入れて、薬品で殺虫する姑息な手段がとられた。真空消毒器は一度に二、三百冊を車に積んだまま移動して消毒が出来、簡単なことから殺虫殺菌に便とされた。多くの人の手に渡る図書の配慮として、そうした設備は遅きに失する感があつたが、免も角実施された。

高村館長時代のも一つの顕著な事蹟は図書館職員の待遇改善に意を用いたことである。館長に就任した直後、館員に対する挨拶の要旨は、一つは勤務時間の励行であり、他は言いたいことは何でも言えということであつた。館長室に閉ぢこもつて副館長を通じて話するのではなく、直接腹臆なく言えというのであつた。これは館内を明るくする効果があつた。野村前館長と違つて年が若いということもある。如才のない性格ということもある。館員の旅行には共に行き談笑した。図書館の職制ではこの時初めて部課長制が出来た。これまでは図書館規則によつて主任司書、司

書、司書補、書記、出納手、用務員の階層があつて、司書と司書補に手当がついた。しかしその手当はタイピストや電話交換手などと同様な技術職員と考えられ勝ちで、専門職としての司書を頭において図書館側の考えとはかけ離れていた。そこで司書司書補の手当は多少つくにしても、事務当局に勤務する職員との昇給差がかなり低くなる。事務職員は部長・課長・係長の役職制が存在して、移動の度毎に昇給するに反して、図書館員は移動し得る範囲も狭く、且つ役職がないので何時までも低水準にあつた。これを三十五年一月改めて図書館にも部課長制が導入され、同年四月実施された。その時のスタッフは次の如くである。

館長	高村 象平
副館長	柄沢日出雄
部長	伊東弥之助(総務) 石川 博道(図書)
課長	岩崎 恒雄(貸出) 堀田 信夫(和漢書) 笠野 滋(洋書) 丸山 信(調査)
	阿部 隆一(斯道文庫)
総務課	田中 正之 落合喜久子 佐藤 次郎 生田 直
調査課	岡野 盛繁 太田臨一郎
和漢書課	衣川 専一 永井 季子 天田 尚子
洋書課	毛利 信吾 吉岡洋一郎 馬場万里子 小田 恭子
貸出課	大岡英太郎 碓井 義美 大谷 愛人 池上 明哉

これに出納手・用務員を加えて人数は三十九名であった。事務職員と図書館員との給料の格差は期待した程、多く縮められなかった。館長・副館長の役手当が兼任であるということから、部長・課長もそれ以下の水準ということが原因であるように思われる。

このスタッフから国分剛二の名が消えている。国分は三十三年十二月四日死去した。彼は三辺との主任争いに敗れてから、不平不満のうちに過ごし、戦後図書館が復興した二十四年、白内障で眼が不自由になり、休職を続けていたが、回復せず歿した。所謂荘内閥の最後の人で、出納手から司書になったのであるが、努力家であり、名物男でもあり、ひと頃の図書館員の典型の如き存在であった。国分の図書館における功績は郷土史書の収集に努めたことで、郷土史書の豊かさは今以てこの図書館の特徴を型作っているが、その淵源は実に国分にあると思われる。

高村館長の任期中に私立大学図書館協会の常任理事校となったことも、記述して置く必要がある。初代監督田中一貞時代に図書館協会の理事校になったことがあったが、以後永い間、他の図書館との交渉には消極的であった。昭和五年東京私立大学図書館協議会が創立されても、更らにそれが昭和十三年に全国私立大学図書館協会に発展しても、理事校にはならなかった。ただ集会の開催は各校持廻りであるから、昭和五年九月小泉監督時代と昭和十三年五月高橋監督時代、更らに戦後昭和三十一年五月野村館長時代に慶應で行われた。戦前は図書館内の一室で行える程の人数であったものが、戦後には講堂を借りねば出来ない程の参会者があった。そして拒み切れなくなって昭和三十四年四月常任理事校になった。任期は二年で、館長・副館長と専任係員一人がこれに当り、大過なく責任を果たした。

またこの時代に出来て、後に大きな影響をもたらせたものに慶應義塾労働組合の結成がある。職員会の活躍は或る

時期に限られ、漸次親睦会化し、職員の間にも不満が昂じ、図書館員からも脱退者を出していたが、それが四谷の病院から始まって、日吉に、三田に波及し、全慶應の教職員を一丸とする組合が昭和三十四年六月結成された。そして全慶應のストの一環として、図書館でもストライキが行われるようになった。

他方、学生自治会が動き初める徴候が見られる。三十五年四月図書館に対して休暇中の閲覧時間の延長と館外貸出の拡大を要望した。休暇中は通信教育部のスクーリングが無いが、正午で閉館される。それは永い間の慣習による職員の既得権であった。館外貸出範囲の拡張は今後考慮の余地を残す、と回答して、この時の学生は納得した。同時に研究室にも修士学生の要求があるという風であったが、まだ及び腰であった。学生自治会の動きも漸次活発になって、図書館・研究室ばかりでなく、全塾を揺るようになって行った。

最後にこの期の善本収集に触れよう。高村館長の方針は前館長よりも実用的であったといえよう。良い本で、しかも利用される本を集めようとした。前述の研究室との接衝のうちにもそれは読みとれよう。寄贈された麻生太賀吉の斯道文庫は日吉の寄宿舎の一棟全体を使用したもので、図書の収容能力は大きく、その後の大きな寄贈、例えば平岡好道教授よりの和漢書三千冊、松永安左衛門・安川寛寄贈の亀井南冥・昭陽父子の自筆稿本・未刊精写本は皆、ここに収められた。同時に文部省の総合研究費の補助を得て、室町時代の邦人撰述の漢籍注釈書のマイクロフィルム撮影に着手した。これは未刊東洋古典書のマイクロによる一大収書を志ざす発端となった。

この外には経済学部教授永田清、前館長野村兼太郎の蔵書が寄贈された。特に野村旧蔵書は研究室には庶民資料を、図書館には和洋図書をと分割されたが、幸田成友、滝本誠一の旧蔵書と相俟って、日本経済史文献の宝庫を型作

った。

三 前原光雄館長の抱負

昭和三十五年六月に奥井は塾長の任期が来て、辞任したため後任者の選定が行われた。第一候補は藤林敬三であったが、藤林は当時中労委の委員長をしていたので辞退した。残る候補に高村象平と法学部教授前原光雄とがいたが、評議員会会長小泉信三は塾長は少くとも二期続けなければ仕事が出来ないという意向があったので、それには年齢の若い高村が良いと考えられた。こうして高村塾長の出現を見たが、高村がやめた図書館の館長には塾長の対抗馬であった前原を推し、図書館商議會開催の前に承諾を得た。七月二十九日の第十六回商議會における当局の館長推薦は前原一名であった。そして当局側の計画通り

前原光雄十二票（十八票中）次点 松本正夫

となった。高村が前原の意向を打診し同意を得たとき、前原には図書館に対して何か腹案を用意しているように見えたとそうであるが、事実、前原新館長は塾の図書館のあり方に不満を持っていた。その直接の動機は三十三年八月、ニューヨーク大学で開催の国際法協会総会に日本代表として出席したとき、その往復路にあたる大学を参観した。サンフランシスコから初まって、シカゴ大学、ハーバード大学、コロンビア大学などを見た目からは、慶應図書館が古くさく思えて仕方がなかった。前原は岡山県出身で大正十四年法学部法律学科を卒業し、すぐ助手になった。昭和五年七月から七年九月にかけて英仏独に留学したが、主として独仏に滞在し、文学部の今宮新とベルリンで一語に勉強し

た。今宮はダーレムの古文書館に通って難解な文書に取組んでいたが、前原は図書館へは行かないで、専らベルリン大学で語学を身につけることに熱中したという。従って、欧羅巴の図書館の印象は前原には薄く、戦後の米国の大学図書館の規模やピチピチした活動振りが強く印象づけられた。前原は商議会の席上でも、館員への挨拶にでも「私は図書館には素人だから」ということを常に前提としながらも、慶應の図書館は非常に遅くれたもので利用が出来ない。どうしても改善しなくてはならぬ。商議員諸君は図書館に対する注意や提案をどしどし言って貰いたい。不満だらけだろうが忌憚のない所を指摘して欲しいと言ひ、調べものをするには目録が不備であり、書庫も狭く、図書の配列も大きさによる年代順では不便だと言ひ、より精密な分類にすべきだと主張した。また図書館月報では「大学の付属図書館は学生の利用ということが重要な目的の一つである。それ故にできるだけこの目的に添うようにしなければならぬ。蔵書の面でも、なるべく大学の学生の利用するようなものの整備に留意し、この種の図書の充実を図った上で高度の学術的な図書の充実に心がけるべきであろう」従来の図書館が研究者本位で学生は寧ろ従であったのを是正し、「現在は学生数に比して、図書館を利用する学生の数はあまりにも少ないように思われる。その原因がどこにあるか明かにすることは大切である。そしてその障碍を除き、学生をしてもっと図書館に親しむをもたせて、利用度を高めるようにせねばならない。」そしてその一端として学生出入口は地階からをやめて、教員と同様に正面玄関からの出入を考慮するよう求めた。また同じ文章の後半では「図書購入費には限度があるので、各部門の図書を心のままに購入することは許されない。…この場合に、なるべく各部門の間に平衡を保つような方法をとリ、或部門に厚く他の部門に薄い不均衡な購入方法は慎しまねばならない」これは法学部教授として法律関係の図書が薄いと判断したらし

い。こうして様々なところで挨拶したり、記述したりして断片的に不満を表明しているが、要するにごく最近、見て来た米国の大学図書館のように改めたいということにあった。そして慶應には図書館学科があり、その優秀なスタッフを大いに活用して行きたいと述べた。図書館学科は設立以来、既に十年を閲し、多くの人材を社会に送り、学内には優秀な学者を擁して押しも押されもしない地位を国の内外に礎きあげている。図書館の充実には多くの経費を要するが、図書の取扱いに関する知識を得ることにかけては、図書館学科のある慶應は大いに有利な地位にあると考えた。前原館長の図書館学科への接近は、同学科主任橋本孝の大いに歓迎するところであって「一般的に大学図書館は保存を旨とし、保存に汲々として、資料を見せる、サービスするという努力に乏しい。塾のみでなく、日本の大学一般がそうである」そして米国式に徹しようというやり方は終戦後、公共図書館の方が先んじ、大学図書館は一步も二歩もおくれている。「前原先生が卒先してあらゆる犠牲をはらっても、近代化しようと言われるのはまことに喜ばしい」橋本の近代化というのは利用本位の米国式のことであった。二人は手を携えて図書館を改革しようとした。

しかしそこには隘路があった。明治以来の古い建物は既に野村館長の時代から狭く、分類替をしようにも展開すべき書棚もない。増大する学生を収容する校舎を建てる費用は出ても、館員数は制限せられ、新しい企劃は中々出来にくい。出来ることから初めざるを得なかった。館長希望の図書の偏重是正ということで、島谷英郎教授選定の米商法判例集が問もなく購入された。法学関係の図書が比較的に少いということは法学部教授の間では屢々いわれたことで、戦前にも峰岸治三教授が中心となって収書を計画したことがあり、其後も暫々話題にはされた。しかし前館長時代英米法の収書に努力したりしており、極端に偏頗という訳でもなかったように思われるが、ただ経済学部の教

授による館長が永く続いたので、感じとしてそう受けとられたように思われる。次いで学生の出入口が正面玄関から改められた。受付の人員の配置替え、施設の準備などで実施は三十六年七月になった。一部の教員からの反駁を覚悟してのことであったが、さしたるトラブルもなかった。受付を若い出納手が交替で勤めたので、教員に対する言葉の上での紛争は多少あった。

幸なことに高村新塾長は図書館長時代の増築書庫に対する答申書を再び取り上げて、その要望に添う形ちで増築を完成させた。総工費九千九百五十万円、三十六年二月に理事会を通過し、最終設計図が出来たのが三月十日、同二十日九日地鎮祭が行われ、十一月二十一日完成披露の式があった。設計管理は三菱地所部、施工は安藤組であった。建物の詳細は

建坪一五九・九三〇坪（五二八・八七四²m²）

延坪八五八・五五三坪（二八三八・一九四²m²）

構造鉄筋コンクリート、地上三階地下二階

規模地上三階 外郭のみ

地上二階 閲覧事務室、レファレンス室、開架室、雑誌コーナー、便所

地上一階 積層書庫

地下一の一 斯道文庫

地下一の二 研究室書庫

別棟 便所

設備 イ座席数増加

従来 二四八席

(三田在学生
八、三九二名に対し)

完成後四〇〇席

二、三九二%
四、七六〇%

口蔵書収容数

一層十萬冊と見て完成後三十萬冊増

レファレンス室三、五〇〇冊(従前二、〇〇〇冊)

開架室当面二、五〇〇冊(完成後二萬冊)

雑誌コーナー開架雑誌和洋計一五〇種

この建設は高村塾長の思い切った英断というより外、云い様がない。奥井塾長時代の最終案で、しかも否決になった建物は一二二・六坪で地下二層地上二層の四階建てで、将来上層に積層二階を建てよう設計されたものであったが、今度のものは建坪においても階層においても大幅に拡大されたものである。但し三階と地下一の二は外郭のみで、内部は後日廻しとなり、又エレベーターも予定場所は空洞で施工されなかった。元来が書庫増設で初まったものだけに、不便を伴うのは止むを得ないが、兎も角その一層を書庫でなく閲覧者の出入出来る階層としたことは、今迄出来得なかった試みを実施することを可能にした。大閲覧室の中にあつた閲覧台をとって閲覧席を作ったことは席数の増加の利点のみでなく、閲覧室内の静寂を増すものと期待された。新設の閲覧事務室は閲覧台より遙かに広がった



新設された雑誌コーナー

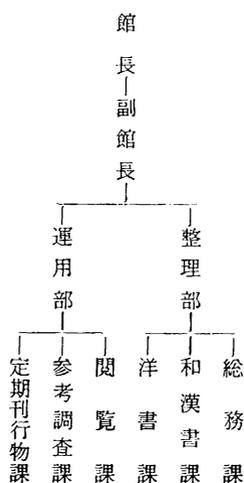
から、ここに貸出課の全員を收容し得て、館内出納も館外貸出もあげて処理し得た。レファレンス室も従前より二倍の広さになり、レファレンス・ブックも増加された。この階に初めて試みられた開架室には、教員の指定図書を置くために三十六年四月早々に推薦依頼状三百六十四通を発送して準備した。雑誌コーナーで新刊雑誌を開架に踏切るのにも勇気が必要とした。そして良く閲覧される雑誌のバックナンバーも收容する戸棚も設けられた。新しい書庫にはキャレルが作られた。従来図書館には教員読書室さえないとして、教員から非難されていたのを解消するためであったが、書庫の中は夏は暑く、冬は寒く、結果的には教員の利用は少く、大学院学生が良く活用した。

書架の大幅な増加が見込まれるのを契機に分類替の希望が出された。法学部若手教員による、今にして行わなければ将来の不便は図かり知れないとの突き上げがあり、館長も強く要望された。これは大問題であって、図書館内の部課長会が頻繁に開かれた。新しく分類表を作るのでなく、日本十進分類法(NDC)に和洋と

も抛ろうということには意見の一致を見たが、配架はその儘で、カード上での分類替えの意見が初めのうち強く主張された。分類替の可否には賛否両論があつて、理想的には賛成でも五十万という蔵書を考えると躊躇するむきが多かつた。この間、図書館には研究会が持たれ、三十六年五月には中村初雄教授が、六月には中央大学図書館嘱托の津久井安夫が「中央大学図書館の再分類」と題して講演、七月には笠野滋が報告し、斯道文庫の阿部隆一も再分類可能の意見を館長に具申した。結局、先づ開架室の図書をNDCで分類し配架すること、次で新書庫が使用される段階で、新刊書を新分類で配架する。既存旧分類の図書は、それらの成果を見てからとするよう定まつた。分類の変更は単にそれだけにとどまらない。分類の深度を何処までにするかとか、目類法をどうするか、受入簿の変更、函架記号の変更による図書ラベルの新様式の採用など、付随する問題が後から後からと出て、實際がなく煩雑であつた。前原館長は再分類のときは教員に応援させるからと、いとも簡単に強要されるが、それぞれ専門の教員が出て、図書館の分類はうまく行かないことは館員が常々経験するところで、英文のエッセイのようなものはどちらともとれる。専門分野が重なり合っている場合、性格の強い教員は自己の分野を強く主張し、全体としてバランスを崩し、却つて混乱を起し勝ちである。結局は図書館のことは館員のみの方に俟たねばならない。

十一月建物は落成しても什器の調達がおくれ、又書庫の乾燥さから見ても、すぐ図書の移動を初めることは出来なかつた。三十七年一月から新レファレンス室だけが開かれ、その他は新学期の四月七日まで待たされた。閲覧台が新館に移り、書庫の拡大に見合つた図書の配架替えが考えられ、出納手の便宜のために、良く利用される図書程、閲覧事務室の近くに置かれ、利用度の少い特殊文庫や洋書、和装本類は遠く離れた階層に置かれた。それらは二、三月の休

暇の間に行われた。新しい建物とともに新企劃による運営のために人員の増加が考えられ、初め十九名の増員を求めたが、結局は司書補三名、書記二名、出納手四名計九名の増加が認められた。同時に事務組織も従来の事務室で仕事をする部門と、新建物で閲覧に便を図る部門とに大別する新しい部課制が考えられ、四月承認された。即ち



であったが、三十七年三月館長の改選期に当り、商議会では満場一致、無投票で前原が再選され、同時に副館長の交代があり、柄沢日出雄が退任して伊東弥之助が任命された。伊東は整理部長を兼任し、石川博道は運用部長になった。総務課四、和漢書課六、洋書課五、閲覧課一八、参考調査課三、定刊課三、それに用務員四と館長・副館長・部長を合して、全員四十六名となった。

四月の開館と共に図書館管理の上ですっきりしたのは、図書館学科が新築の西校舎二階へ移転したことによって、図書館内にあった図書館学科レファレンス室も移転されたことである。図書館学科図書室は一般学生が地階から入館した頃にも、玄関から入れて紛争があったが、玄関から一般学生も入るようになった時も、館内の静肅を保つため定

員制を採ることになり、入館証を使用した。宿題の多い図書館学学生には入館制限に対して文句を言う学生が多く、トラブルの種であった。それが解消されるわけである。又、斯道文庫は図書館の一部であったが、三十五年十二月独立して文庫長に松本芳夫がなり、阿部は主事となった。そして図書館とは全く別個の研究所として、図書館地階に別の出入口から出入することとなった。も一つは、書庫が拡くなったので、旧書庫の一室を貴重書のみを入れる区劃とすることが出来た。従来分散されて保管され、取扱いに不便であったが、それが解消され、太田臨一郎がその専任となった。太田は幸田成友旧蔵書の整理のため囑託として就任していたが、和洋書にひろい知識があり、適任と言えた。平生は鍵がかかっているが、参観者があるときこの書庫を開いて見せると喜ばれた。

従来目録を探ぐり、出納手によって図書が閲覧者の手に渡ったのが、開架室が出来たことで学習に最も近い図書を簡単に手にすることが出来る。雑誌もすぐ見られる。レファレンス室も広くなり、その係の人数も増えた。新館の開設による便宜に加えて、三十七年二月からルーモプリント複写器を備えて、図書の複写が簡単になった。今迄は写真複写で、しかも外注の斡旋であったため時日を要した。新採用のものは注文の翌日には手渡された。更らに館外貸出も修士二冊、大学四年と通年ストーリーリング生は一冊、それも学期中を通じて借り出せた。期限は一週間、延滞すると一日十円徴収する方法が採用された。図書館は見違える程に便利になった。

最後にこの期に副館長をやめた柄沢について記そう。柄沢は経済学部教授兼任で副館長を勤めた。大学教授の肩書きをもちながら、至って気さくであり、好んで酒を嗜なみ、酔えば陽気になり、他人からは奇矯とも思える言動をして、更らに親しみを増した。昭和二十七年五月、図書館大会が福岡で開かれ、其後、国公私大図書館部会が人吉で催

された。球磨川に面した宿屋に一行が当着して、まだ部屋割りもきまらず、廊下でがやがやしていたとき、突如猿股一つの背の高い瘦せた男が川に飛びこんで泳ぎ出した。宿屋の手すりから「あれは誰だ」「慶應の柄沢だ」という訳で一遍に名前が知られた。宿屋側は川が深く流れも急で、向へ行く程緩く、河原が拡っていた。そして一と休みする間もなく泳ぎ帰って来た。向側へ泳ぐ柄沢を見て、そのとき同行した石川は宿屋の浴衣をかかえて迎えに飛び出したが、橋は渡らないですんだ。石川が心配したのは柄沢の身体には酒が入っていたからであった。こうした逸話は限りなくある。善く言う人は飘逸だ、風格があるというが、反対に気まじめすぎる人には一視もされない。仕事は大まかで、細かなことは不適であった。「俺は時代を間違えて生れて来た。戦国時代に生れば良かった。」が口癖だったが、そうした面も確かにあった。疎開図書の運搬で人手が極度に不足しているとき、酒をふるまったりして駅員などを感激させ、手廻しよく仕事をさせるなどは得意であったが、既述のようにホーレイなどの猶太系英国人との接衝は苦手といえた。戦国時代は権謀術数の時代であるから、正直すぎる柄沢が一國一城の主となれるかどうか、わからない。柄沢は昭和三十六年十一月、戦前戦後を通じ、図書館に功労があったとして義塾賞をうけ、間もなく職を去った。

四 新図書館計画委員会の発足

フィッシュ教授の発言によって、松本理事を中心におしすすめられた新図書館建設委員会の計画は、突然に起り実現をいそいだが完全に失敗した。この計画に対しては当事者以外はおおむね悲観的で、高村館長もそうであったし、

次に新図書館計画委員会の推進役を努めた図書館学科主任橋本孝も同様であった。しかしフィッシュ教授の塾図書館に対する批判と改善策とは、橋本主任にとって耳に聒膺が出来る程聞かされた言葉であった。慶應義塾が日本では数少い国際大学連盟への加盟校である以上は、理想的な大学建設へ邁進すべきであるが、それにはいくつかのハンデキャンプがある。その中の一つとして図書館が旧式なこと、その利用が不便なことは是非改めなければならぬ。蔵書の分類も、カタログもやり直さねばならない。それには全く新たな別種の図書館を三田に建てる必要がある。図書館学科はロックフェラー財団の援助によって、毎年米国から教授が招聘された。最初の五ヶ年計画の援助が打ち切られた後の橋本主任時代にも、第二次・第三次の援助が行われて、米国人との接触は深い。彼らは皆同じ様な意見を述べ、日本で最高の図書館学科を持ちながら、図書館の現状は理想と程遠いといわねばならない。図書館学科は図書館に対する努力が足りない、といった風である。

ところが前述したように図書館学科設立当初より、図書館と図書館学科とは仲が悪かった。野村館長とギトラー主任とは性格的にうまが合わなかったといつて良いであらう。野村館長がハワイへ出張教授して帰国後は多少認識が改められたが、それはカレッジ程度の日吉分館への適応であり、最高学府の図書館としての誇りとは違っていた。次の高村館長は図書館学科との接触にも意を用いて、両者の懇談会を三十四年六月に持ったが、野村館長のアカデミック的伝統の継承には確信を持っていて、図書館学科側の意見を丸呑みにするような意志は持たなかった。要するに利用本位の米国風に改めたくても、改めるにつけ込む隙も見出せないのであった。ところが前原館長はアメリカの大学図書館を見て来た直後の就任であり、図書館改革に図書館学科の協力を申し込んだ。橋本主任にとっては当然来るべき

ものが来たということであつたらう。橋本主任の考えは図書館の建設などということは、松本理事のときの様な即席では黙目だ。十年がかりでも良い。利用者の意向を確かめ、現状を分析したりしてじっくりやるべきだ。それには実行力ある委員会を作らねばならぬと言つて、先づ前原館長に話し、次で高村塾長に構想を打明け、同意を得た。最高首脳は計画委員会であつて、全塾的構想に立ち、新図書館計画の大綱を定めるために、委員長に塾長を据え、理事、学部長、館長、学科主任がそれに参劃する。計画委員会の諮問機関には実行委員会があつて、図書館長を委員長とし、委員は図書館学科主任、本館分館の副館長、研究室運営委員長がなり、具体的計画を立案する。その下に企画分科会を置いて実施のための企画を練らせる。これには図書館から伊東、図書館学科から藤川・沢本、教員から斎藤幸一郎が委員に選ばれた。他方、実行委員会からの指示による図書館の実態調査、利用者調査等については調査分科会が作られ、各学部から選ばれた教授・助教、それに図書館から石川・津田・笠野らが委員となつた。

三十六年二月二十四日第一回実行委員会が開かれた。委員会成立の経緯の説明のあと、塾長は「アメリカよりの援助の見込は視察団を派遣すること及び向うからのコンサルタントを招くことは援助の見込もあるも、塾として自力で出来るだけのことをすべきである」旨を述べた。要するに塾として最善をつくして後は、米国の援助を期待していたといえる。こうした基本方針の下で、前原館長を頭に、企画分科会が中軸となり、事務局の笠野・毛利がその手足となつて働いた。そして三十七年六月二十日、前原実行委員長より計画委員長たる高村塾長に宛てた「基本方針に関する答申」は、この間における精力的な活動を物語ると共に、其後の方向を示している。大要を述べれば、先づ現状の実態把握のため本塾における図書管理の調査と、それに併行して利用状況の調査が行われた。特に利用調査は教員と学

生とに分けてアンケートに記入を求め、それを学問的に集計して発表した。大量のアンケートの分類操作は困難を極めたが、斎藤幸一郎・十時巖周助教授らの努力が実を結ばせた。その結果として第一には漸進的に現状を改善する。そして三田に限らず調査を日吉・四谷・小金井のキャンパスにも拡げて行い、総合大学としての効果を高めよう。第二に現状の改善のみでは近い将来に行詰ることが確実であるから、新計画の基本方針を樹立して根本的解決を計らねばならない。その為には大学における図書管理サービス機構を統括し得るような一元的機構が必要である。第三にその具体案として一に海外大学図書館を視察せしめる。二に海外から大学図書館経営及び建築のエキスパートを招聘する。三に図書館建築の専門家、利用者、図書館員を含めた建築委員会を作って具体計画に基いた設計を作る、とした。これは計画委員会の審議で全面的に支持されたが、其のあとの雑談裡に語られた雰囲気は「現在の図書館を改装するのは不経済であるから、この建物は他の目的、例えば福沢記念館、博物館などに転用し、新図書館を建てるべきである。その新図書館は慶應義塾の総合図書館として日吉・四谷・小金井分館と充分な関連を持たせるばかりでなく、研究室・大学院とも不可分である。将来の塾の教授法がどうなっていくかと言うことは最大の問題点で、新図書館計画は当然それに左右されるが、少くとも学部学生に対して開架式サービスを拡充されることが望ましい」又、気賀健三学務理事は米国から帰朝したばかりであったので、ロックフェラー財団のパーカー博士・トンブソン博士、ALAのクリフト氏、アシャム博士、イリノイ大学のダウンズ博士・フィッシュ博士などに会見した印象を語り、塾からの調査団受入れの準備が進められていることを報告した。

先きの新図書館建設委員会の要請を拒否したALAも、其後の新図書館計画委員会の発足と活動振りには注意をと

めていたものと見え、学校当局に対しては慶應で図書館を建てたいというのは本当かという問合せがあり、他方米国人と交渉の深い図書館学科側にも、ロックフェラー財団のファーズ博士などから、援助は受入れられるだろうとの言質があった。そこで米国大学図書館視察団の人選が行われ、高村塾長を団長に、気賀理事、前原館長、橋本主任、小池基之教授、それに橋本主任の希望で実務者からということ伊東・笠野の名があげられていた。ところが三十八年二月にAL Aのアシャム博士から訪問団員の人数と人名の希望が述べられて来た。それによると高村塾長、石丸財務理事、前原館長、橋本図書館学科長の四名で、若し四名中一名が参加できない場合は、伊東副館長を補充にということであった。

訪問団は米国大学図書館の視察が名目であったが、本心は米国からの援助の打診ということがある、その援助も橋本観測では半額、学校側では全額を希望していた。学校側にはまだ増築の必要ある建物が多く存在している。四谷の病院は四十年迄に、工学部の日吉移転も其後に控えているし、三田では研究室の新築問題があった。図書館は増築を終えたばかりであるから、次は研究室である。研究室を何が何んでも作れという学内の声を塾長も押えることが出来ないで、新図書館建設への半額負担は困難と考えられた。特に石丸理事が難色を示した。AL Aがアドミニストの派遣を希望したにも拘らず、塾長が降り、石丸理事が降り、橋本主任は健康上から医師の反対で罷めとなり、派遣団は気賀理事が塾長代理という格で参加し、以下前原館長、伊東副館長、笠野洋書課長という寂しさになった。もっとも前原館長は夫人を同伴し、米国には留学中の沢本図書館学科主任補佐夫妻が待っていて協力した。

橋本主任の半額援助と、学校側の全額援助の希望とは調整されないまま、視察団は三十八年九月二日羽田を出発し



前原光雄

た。サンフランシスコ、シカゴ、デトロイト、アンナバー、イサカ、ボストン、ニューヨーク、ワシントン、セントルイス、ロサンゼルス、ハワイを経る四十五日の旅で、十月十六日に帰着した。訪問大学は二十余校、図書館を中心に見学したが、総長を含む理事、図書館長、図書館学校長及び多数の図書館員と意見の交換をした。気賀理事は九月三十日ニューヨークから塾務の都合によって帰国し、沢本主任補佐はヨーロッパ図書館視察のためプリンストンで別れ、後半三分の一の日程は図書館員のみで視察になった。大学と図書館訪問の合い間にはアジア財団、ALA、ロックフェラー財団に立寄って懇談したが、招聘に対する礼を述べた程度に止まり、援助の打診には少しも触れなかった。

帰国後、気賀理事と前原館長には視察報告が残されているが、米国の大学図書館の現状を理事の立場から、図書館長の立場からの感想であって、建設資金獲得については語られていない。米国財団から援助についての期待は高村塾長の其後の談話で、努力が足りなかったという風に表現しているし、橋本主任はともかく塾長が青写真を持って行けばどうにかならう。準備と打診が不足していたと語る。もっとも橋本主任の半額負担は、その財源を学生から徴収する設備拡充費の増額に求めているから、四十年学費値上げにより慶應義塾初まって以来の、大規模な学生ストが起きた状態から言って、石丸理事の見通しの方が適切であったのかも知れない。

図書館は大学の心臓であるということが一般に言われているが、日本では言葉だけであって、米国はそのものずばりである。大学教育は図書館の活用なくして行えない。またその大学の教授団の構成は該大学の出身者のみによっているのではなく、他の大学の優秀な教授を常に抜擢して構成される。その際、優秀な人を集めるには優れた図書館の存在が是非とも必要である。また大学基準協会は設立当初だけ干与するのではなく、米国のそれは絶えず質的向上を求めているから、図書館は一刻も停滞的であり得ない。従って図書館に対する学校当局の身の入れ方が日本とは格段の相違である。かてて加えて米国の一流諸大学は日本の大学に比して、歴史、規模、すべてに隔たりがある。司書職の確立には既に五十年の歴史を持っている。階層的秩序、労働時間の正確さにも十歩二十歩の差がある。図書収集の徹底さ、或る大学では或る部門の世界の図書を全部収集していた。又一地方では各大学が分担して行う。相互貸借制度は大学、公共図書館の障壁さえ存在しない。更らには図書館の建物と設備には羨望を禁じ得ない。折から米国は図書館の立替え期にあった。古い記念館的図書館の外に、新しい利用者本位の、外形はあまり変哲もないが、内部は広い床面積を持ち、広範囲な開架式書棚の傍に机があり、ゆったりとした間隔で柔い掛心地のよい椅子があった。目録台の配置も、レファレンス室もゆったりして気持がよい。窓はスモークド・グラスのところもあり、室は冷暖房、その上換気にも注意が払われている。万事万端、本塾図書館と格段の相違で、何処から手をつけて良いか途方にくれると、帰途ロサンゼルスのカルフォルニア大学ムーア副館長に語ったところ、視察団の見学した図書館は米国内でも最も優秀なもののみで、それもここ五年来のことだと慰められた。

帰国後は学校当局に全く新図書館建設の意欲が失われた様であった。新図書館計画委員会は存続されてはいたが、

学校当局は第一校舎の屋上に仮りの研究室の増設に着手し、図書館には音沙汰がなかった。そこで企劃分科会では当局が図書館をたてる意志があるかどうか、確認のための質問書を提出しようという動議さえ出された。しかしそれは不発に終わったが、学校当局は専ら新図書館の建設よりも、図書館の中の改造を望み、渡米視察の成果を其処に發揮するよう督促された。その第一目標は図書館のみならず研究室をも含めた全塾の総合目録の作成であったが、図書館側、特に伊東は気乗り薄であった。各図書館、研究室から目録カード一枚を集めて、並べれば立ちどころに出来ると、簡単に考え勝ちであるが、図書館間にも記載方法に相違がある。それは一応目をつぶるとしても、研究室のそれに難点があった。研究室の事務員は小人数で、しかも多量の新規購入書を消化せねばならず、又図書取扱いに未熟であったので、到底一つに纏め得る目録は作り得ない。それをするには先づ、統一した目録法を定めねばならないし、更らに図書を扱う係の再教育が充分に行われざる限り出来なかつた。そして時日をかけて仮りにそれが出来たとしても、利用者の便宜にはならない。というのは研究室の閲覧は閉鎖的であり、その研究室所属の教員しか利用が出来ない。それは三田・日吉両研究室の規程に明記してある。伊東は日常の業務に多忙である館員を、強いてそれに振り向けるのは勿体ないと感じた。他にすぐやるべきことはいくらもあると考えた。

帰国した直後すぐ感じたことは図書館内部をもっと充実させることであつた。三十七年から初めた図書の新分類採用はまだ軌道に乗つたとは言えない。NDCは新収図書から初めたので、古い分類の図書をも新分類に切替えるかどうかの問題が残っていた。米国大学図書館視察でうけた印象では、古い分類を改造することはあつても、新分類に切替えたところは僅か二つであつた。コーネル大学とセントルイスのワシントン大学の医学図書館であつたが、後者の

新分類採用は過去に遡らない。年代が経つにつれ利用頻度は新分類に集中され、旧分類のものはその儘でも差支えないとされた。そして他の多くの図書館ではてんで問題にされなかった。これは予期に反する驚きであった。こうした結果から旧分類図書の新分類替え作業はこの段階で見送ることにした。ワシントン大学の医学図書館と文科系の慶應図書館とでは、利用の仕方に相違があろうが、程度の差であって、永い年月の間には不便さが減ずるだろうことは確実であろう。そして館員に予猶が出来る場合が若し来たら、そのとき行っても差支えあるまいと思われた。

分類が二つに別れるという不様さを我慢せざるを得なかったも一つの原因に、新分類作業の遅れが目立つことであった。三十七年四月に開架書棚に並べる図書の充実とその新分類に先づ全力がそがれ、引続いて新収図書が新分類で配架された。新しい仕事であり、緊張の連続であったので、そこに作業の遅れが目立った。この図書館は購入から閲覧出来るまで時間の短かさには定評があった。それが遅れる。これをせめて従前程度にしたいものである。殊に洋書課には無理があった。笠野課長は新図書館計画の事務主任でもあり、その上、米国視察団に加わって永い留守をした。その間退職者も出るということも重なって、遅滞も目立った。人事の調整が急がれ、三十九年四月笠野は洋書課長専任とし、渋川雅俊をレファレンス課から洋書係に移して補強した。新分類の採用は以上述べたように準備が大変であり、又実行の段階でも旧分類には手をつけないというような方法が止むなく採られた。しかし其の後の図書館が大幅な開架に進むだろうことは確実といえたから、苦労があっても、困難があっても、またたとえ旧分類のものに遡及しない変則的のものであったとしても、押して実行したことは良かったことと思われる。それは前原館長の督促と鞭達によるところであって、前原館長の図書館に残した最大の功績と言えよう。新図書館事務には医学図書館から、

中江広一を総務課に迎えて兼任させた。そして女子一名を増員して、毛利の兼務もはづした。

三十七年発足した増築棟の二階は閲覧事務室と開架室、雑誌コーナー、レファレンス室が並存して利用者の混雑で大変であった。図書や雑誌の開架は便利であったので利用者の殺到するところであった。しかも此の時期にゼロックス複写機を設備し、雑誌係がこれを作業したので毛利を初めとするこの課の繁忙はひどかった。その対策として毛利の新図書館事務兼任をはずすと共に、二階の混雑を和げるために、増築棟三階を雑誌専門のフロワーとする計画を立て、視聴覚機器やゼロックスもこの階へ集中して、事務の簡素化にも役立せようとし、学校当局に申請し許可を得、三十八年十一月から二階から三階への階段設置の工事に着手した。伊東の構想では自然科学系統の図書館では雑誌が閲覧の主力である。人文系でもやがて雑誌の氾濫時代が来るに違いない。そのため雑誌論文目類を集め、すみやかに利用者に紹介し得る雑誌係の養成を目論んだのである。その仕事はレファレンス係と競合するであろうが、当時のレファレンス課は稍々沈滞気味であったので、競争して文献紹介に当らせればそれも良き刺激となるであろうと考えた。

援助によって視察団を送った学校当局は視察の成果を早く示したかったのは当然であろう。しかし図書館のやった仕事は人目につかない内部のことであった。総合目録にも着手しない。日吉図書館の全面開架の要望も、それを実行するには頑固な安食部長の更迭を必要としたが、種々の事情が重なって実行出来なかった。学生に対するガイダンスの強化も求められた。それに対しては米国の諸大学以上の学生数を擁する本塾では、映画による集団ガイダンスが適当と考え、カラー映画作成を前から準備していた。毛利・渋川は映画撮影の講習会に参加した経験を持つので、二人を中心に試作にかかっていたが、力量不足で日の目を見なかった。何より伊東にとって不幸であったことは渡米視察

団の目的を錯誤していたことであつたらう。伊東は三十七年三月に副館長になった。新図書館計画はそれより一年前に発足していた。その間の細かな事情を知らない。一途に新図書館を建てるための努力の累積と解した。米国視察団参加の時も初めの話は橋本学科主任を代弁した沢本の口からで、新図書館をたてるために進歩した米国の大学図書館を見て来ないかということであつた。伊東は新図書館の建設の目的が立って、その参考になることを見て来いということと信じた。従つて渡米中も建築設備に注意が集まり、特に感銘を覚えたのはロサンゼルスのカリフォルニア大学の、新図書館の建築現場に立つたときであつた。殊に電子計算機設置のための地階の基礎工事の強固さには圧倒された。電子計算機の開発こそ何としてでも準備し、実行しなければならぬ。電子計算機は方々の大学で見学させられた。規模はM I T が大きかつた。しかし、これだと思つたのはニューヨーク大学で電算機によって出来た図書目録を手にしたときであつた。多少読みにくくても、一度電算機に入れられた目録は色々な角度から再生される。将来の図書館のためには電算機の知識を館員の誰れかに持たせる必要がある。帰国後、電算機の講習には努めて館員の出席を奨励した。慶應には三十八年三月電子計算機が導入され、西校舎の地階に据付けられた。その第一回の講習には図書館から伊東・笠野・毛利・寺島が聴講した。そして機械の理解には若い頭脳が良いと考えて、図書館学科出の寺島雅由にその研究をすすめ、本人も同意した。しかし残念なことに寺島は間もなく事業会社に去つた。伊東が副館長をやって運用部長になり、石川博道が副館長事務心得になつたのは三十九年十月のことである。伊東の副館長としての最後の仕事は、分館北里記念図書館の津田良成を義塾賞に推薦する口火を切つて、それが通過したことであつた。

前原館長石川副館長のコンビは四十年六月まで七ヶ月続いた。雑誌室が三階に完成して動きだしたこと、雑誌目録

欧文編が出来て、全慶應の洋雑誌の所在がわかるようになったことが、その間の主な事蹟である。又人事にも異動があった。洋書課長が更迭され、笠野は三田研究室の主事に転出した。かわりに日吉研究室の柳屋良博が転任して来た。洋書課の渋川がハワイ大学へ図書館研修のため出張することに定まったのもこの時期である。

新図書館計画委員会はこの頃大した動きを見せなかった。三十九年七月塾長改選期に高村が重任したとき、理事が更迭された。学務理事に佐藤朔が就任したが、その佐藤理事が審査室に研究室の建設案を作らせているという情報が伝って、企劃委員をいらだたせたが、開店休業状態は続いていた。

五 佐藤朔館長のビジョン

第二次高村塾長の時代は昭和四十年の授業料値上げに対する学生のストライキによって、大揺れに揺れて終熄した。おとなしい学生といわれていた慶應がこの種の学生運動のトップを切ったことは、異例なこととして世間の注目を浴びたが、次の年には早稲田大学が、翌々年には明治大学がストに捲きこまれ、年を経る程激しさを加えた。それはさておき、高村塾長辞任のあとには法学部教授永沢邦男が塾長になり、前原光雄は望まれて理事の一員に加わった。前原は図書館への情熱はあったが、先輩永沢の懇望は断り切れない。館長は更迭せざるを得なかった。早速商議会が開かれ、前館長兼理事として前原が出席し、学校側の希望を述べた。それは後任館長に前理事佐藤朔を推したのであった。商議会の協議によって、無投票でそれは可決されたが、商議会の希望として、当局からの一名の指名は今回限りとして貰いたいとの発言があった。

こうした経過で佐藤朔の館長就任はきまっていた。文学部出身の館長はこの図書館では初めてであった。もともと大学令による前の文学科出身には田中一貞があるが、由来、慶應は理財科という名称から変わった経済学部が世に名を知られ、慶應を代表した形を永くとっていた。要職は経済学部出身が多い。図書館長というような文学部出身の者が他校では多いようなポストも、慶應では今の図書館が出来てから五十五年の歳月のうち、三十七年間は経済学部の教授から選任された。法学部出の前原光雄の跡をうけて、やっと文学部出身の館長が出来たわけである。佐藤はこのあと塾長になった。仏文学者の大学総長はそれこそ慶應に限らず、あまり多く存在しない。こうした畑の人は総長という激務には堪えられないように世間は考えている。これこそ異色ある人事であった。

佐藤は明治三十八年東京に生れた。本名勝熊は日露戦争の勝利を祝って名付けられたものといわれる。その後、ペンネーム朔に改名した。中学は開成で、高村象平と同期であった。共に慶應の経済学部予科へ入学したが、本科に移るとき文学部にかわった。幼い頃から詩を作り、大学に入って西脇順三郎の影響をうけて、文学に興味を持ち、転科して仏文学を専攻した。広瀬哲士教授の下で雑誌「仏蘭西文学その他」を編輯し、「詩と詩論」の同人になったりして、新しい仏文学の紹介に熱心であった。卒業後、大学助手、予科教員、文学部講師になったが、胸を患い、闘病生活に永い休講を続けた。佐藤の学者として教授としての活躍は戦後である。闘病中も絶えず仏蘭西の新しい波に注目をしつづけていた佐藤は、後藤末雄・井汲清治らの中世仏文学研究の慶應仏文科のイメージを変えた。其後、欧羅巴に留学して円熟味を加え、帰国して塾仏文科を益々新鮮にして活気あるものにして行った。

三十五年八月には慶應外国語学校長、翌年五月に文学部長、三十九年六月には学務理事を経て、四十年六月図書館



佐藤 剛

長となり、重任をかさねて四十四年六月まで任にあった。行政的材料も経済や法学部出身とは違ったものがあって、それはそれとしての効果をあげた。

佐藤は館長になる前に学務理事であり、図書館にも目を向けた。しかし向け方が今迄の理事と違っていた点は、図書館に係ることは図書館学科に諮問することであった。図書館学科は文学部の一科であり、橋本図書館学科主任を初め、図書館学科の教授藤川・中村・沢本は文学部教授会で常に顔を会わせていたから、絶えざる接触がある。そこで佐藤は専門家としての図書館学科の人々の意向を図書館に反映させるよう努めた。それは図書館長になってからも同様である。

佐藤館長の図書館における最大の業績は、研究教育情報センターへの道を切り開いたことにあるだろう。しかしそれは次節に譲ってここでは図書館の運営に限って述べよう。佐藤館長は文学者であるだけに、今迄の館長と違った感触があった。ある種の語彙をしばしば使う。言葉そのものは平凡なものでも、屢々それが館長の口から出ると一種の雰囲気を感じ出される。

佐藤館長の館員に対する第一声は広報活動（PR）を最大限に行えということであった。前にのべた小展示なども塾報に予告するだけでなく、看板を立てたり、掲示をしたり、宣伝に努める。新刊洋書速報を印刷して広い範囲に配布する。新刊棚を玄関受付の傍に置いて、購入書を利用者に知らせる。「八角塔」という雑誌を発行して図書館の使

命を理解させ、現状を訴える。図書館の建物が重要文化財に指定されると、絵葉書を作って配布する。展覧会の開催には積極的である。そしてその展示目録作成に力を入れた。それは記録としての価値を重んじたからである。ちなみにこの期に催うされた展覧会を列記して置こう。

「国際大学総長会議歓迎展」四十年十月

「サルトル・ボーヴォワール来塾記念両氏著作研究文献展示会」四十一年九月

「幕末伝来蘭英書展示会」四十一年十二月

「資本論刊行百年記念図書展示会」四十二年十一月

「善本稀本展」四十三年十二月

P Rと並んでビジョンという言葉も多く聞かれた。館長は在任中、幾度か館員に図書館のビジョンを聞かせよと声をかけた。就任してすぐにも、或は新研究室建設が進んで図書館が取り残されそうに思はれたときにも、その時々の変化に即しビジョンを持つことを強調された。そして「試行錯誤」を重ねながらも実行に移す。この言葉も館長の口からしばしば聞かされた。又「収書の柱」というのも図書の選定のときよく耳にした。これは館長も苦慮したところであったから、後にも触れるであろう。

佐藤館長の図書館ビジョンはこの図書館を中心にして、日吉・四谷・小金井との連帯を強める中央図書館制の強化で、それは率先実行している。この点では歴代館長中、最も努めたといえるだろう。前館長時代からの課題であった工学図書館分室も、工学部の希望に添って、就任した直後に分館に昇格させた。医学図書館の組織改善の稟議にも積

極的に努力した。十月には分館の副館長の改選があつて、小金井は高橋吉之助、四谷は外山敏夫が任命され、日吉の栗林茂と共に、長期構想の下で本館との連絡を密にすることが申し合わされた。そして中央図書館の柱となるものは、総合目録を中央図書館のうちに置くということであつた。

図書館に総合目録という声は前々からあり、図書館学科の教授陣も熱心に希望するところであつた。佐藤館長は分館や研究室の実状を聞き直し、就任早々の四十年八月、先づ手始めに日吉研究室の目録を本館にも置こうと試みた。日吉研究室の目録は日本目録規則に準拠しており、又仏文学関係の図書は本館より充実していることを、兼々知つていたので、早急に実行を命じた。そして他の図書館・研究室のものは目録記入法の統一を先議してから、作成することになつた。しかしこの二つは実現しなかつた。前者は日吉研究室から送られてくる目録カードで、先づ年報（月報がこの頃は年報になつていた）の原稿となり、そのあと配列される。その配列は総務課の仕事としたが、単なるカード目録の編成でも、片手間では出来ない。本務の繁忙の間をぬって時間をかけても結局出来なかつた。後者は総合目録作成のためには著者主記入のものでなければならぬとされたが、和漢書では書名主記入が図書館界に底流として強く主張されており、館内でも強硬に主張して止まぬ者もあつて、急な結論が出ない。そこで取敢えず洋書の分だけの記入統一が合意に達した。しかし合意が出来ても、訓練に不十分などころもあつて、分散された各所で一斉にそれを実行するわけには行かない。これも整理課の統合の実現なくしては出来にくい。まして過去に遡つての総合目録の完成には、多くの人手と巨額の費用を要し、簡単に出来るものとは言えなかつたが、とも角も初めようとする意欲を打ち出したことは確かであつた。

三十九年に医学図書館の津田に義塾賞があたえられたのは、利用図書館としての評価を高く買われたのであって、その点では三田の本館は倉庫的図書館と評されていた。利用者に対するサービスが医学図書館より劣るとされてきた。これまでに見てきたように本図書館は教育図書館であると共に、研究図書館でもあった。そして田中監督以来、永い間、後者に重きを置いて来た。前原館長以来、稍々学生図書館への傾斜をとったのは、研究室の充実が目に見えて来たからに外ならない。また研究図書館に重きを置くといっても、研究者用の図書・資料の収集と保管に重点が置かれていて、その提供に積極的な宣伝とサービスが不足していたことは否めない。そうしたことは文科系大学にあっては研究者の努力の領域と考えられ、前述したように教員がレファレンス係に質問することは極めて稀れであり、寧ろ研究者のプライドから図書館員に教示されることを不快としているのではないかとの感もあった。自然科学系統には索引類の印刷物が比較的多く、人文・社会科学系統には少いという事情も、研究者に対するサービスに難易が生じて、満足にあたえない因にもなったかも知れない。こうして一概に比較出来ないにしても、利用本位という見地に立てば、医学図書館の方に軍配があるのは確かと言わねばならない。図書館学科は口を極めて医学図書館を推賞した。佐藤館長もその線に沿って、図書館の現状を見守りつつ改善に努力をつみ重ねた。

四十年四月雑誌室が完成されて、増築棟の二階は開架室とレファレンス室と閲覧事務室の三つが残った。そこで館外貸出を活発にするために閲覧机が拡大され、従来の大学院修士・学部四年生に加えて、三年二年の三田に学ぶ全学生に、その範囲が拡げられた。又この時期に欠本書の目録カードの除去が行われた。蔵書は従来、慶應義塾の重要な財産であるとして、欠本の除去は認められていなかったもので、五十余年に涉って発生した紛失本の目録カードはそ

のまま存在していた。閲覧者が請求しても常に見られない図書があり、それが不平の種となった。除去はそれをある程度解消した。又、書庫内の整頓、掲示の増加で、書庫検索の出来る教員や博士課程学生の便宜を良くした。開架室は全面開架から柵を作って入口でチェックする制度にかえた。これは一見退歩であるように見えるが、従来のような全面的な自由は、まだ紛失が多く、三十七年開設以来三年間に二二%の率に達した。チェック制度はそれを充分防止することが出来、それが永く定着した。四十年九月研究者及び修士課程学生のための座席を増さんと、三階予備室を閲覧室に改造した。この室は古くは展覽会場に使われ、その後大量入荷の場合の整理室となり、戦後は亜細亜研究所解消の際の図書の保管場所に使われた。その未整理本を地階に移して、部屋を明け二十四名の座席を作った。

図書館における複写はゼロックス複写機を導入してから、その作業は利用者の好評を得て繁忙であった。そしてその利益を積み立てて、サービスをより有効なものに育成する資金源とした。つまり図書館の自主運営としたのであるが、それは必ずしも学校当局の好むところではなかった。しかし接衝のあと、硝子張りの公開を条件に許可された。

佐藤館長もその方式にのっとり、更らに医学図書館なみの有料サービスを増加して、什器の充実に力を入れようとした。四十一年七月にはA・B・デック(オフセット印刷機)を購入して目録カードを作り、四十二年八月にはエレフックス(整版機)を買って、新刊速報の発行に役立たせた。また視聴覚資料拡充のため四十三年二月レコード・プレーヤーを購入し、レコードも追々買整える手筈をなし、同年十一月には金銭登録器を購入して収支の正確を期した。

収書に対して佐藤館長は研究者のため、学習のため、貴重書・特殊文庫などのものと三つに分け、それぞれ並行的に収集する計画をたてた。研究者のための収集では各学部からの推薦の公平を期して、その範囲を学内研究所や日吉

の教員にもその門戸を拡げた。教員推薦予算の一定額以上は図書館で選定するが、選書方針確立のため、先づ従来の収書分野を詳らかに調査させ、そして今後も続けるもの、新しく収書努力に加えるものを選定した。それが先きに触れた「収書の柱」というものであった。色々な案が出され、模索されたが、結局はボードレルからシュールリアリズムまでの仏蘭西近代詩文獻が柱の一本に組み入れられたことが特徴であろう。これは館長の専攻する得意の分野であり、この図書館に手薄だった部門である。又、計画的収書の中に図書の端本の補充があった。戦争を間にはさんで図書及び雑誌に多くの欠号があった。そこで先づ図書を三年がかりで六百万円の臨時費で補充に努め、ほぼ所期の目的は達せた。次で雑誌のバックナンバーの充実に着手したが、それは途中で退任した。

学習のための収書には指定図書の強化があげられる。指定図書推薦は既に三十六、七年つづけて教員に依頼したが、その後途絶えていた。三十六年には多くの解答が得られたが、翌年は激減した。それは指定書とはいうものの米国の指定書制度のようにはゆかない。教授法に違いがあるので、単に参考書とか優良書とかを推薦してくるのであるから、毎年同様のものとなり、教員自身が推薦するというより、配下の者に選ばせることにもなりかねない。そこで二年で打切っていたものを復活した。四十二年二月当時の大学図書館設置基準案に基づき、指定書の本来の趣旨を館長自身教授会で説明し協力を求めた。そして一、二冊の配架でなく、数冊揃えて開架室に並べ、効果をあげようとした。しかしこれでも根本的な問題で充分効力を發揮しえたとはいえない。或は学生数の少い大学院なら出来るかも知れないと述懐した教授もいた。マンモス・クラスでは図書を宿題として読ませる、きめの細かい米国式教授法は困難であるように思える。

貴重書の収集は図書予算からの制約もあり、目前の利用に重点を置いたのでそれ程多くはなかった。しかしこの図書館の伝統を無視出来ないとして、各分野の教員に応援を求めて購入に努めた。この期の稀品には志田野坡関係の俳書の一括購入、アダム・スミスの書翰二通、ベトナムの風俗資料アンリオジェの「ベトナム民族の技術研究総序説」などがある。寄贈で特色あるものは山本洋一寄贈の故山本久三郎遺蔵書がある。その中には同人宛の書翰二百余通があった。山本は帝劇専務として活躍した経歴から演劇関係者のものが多く珍らしい。又故小島栄次遺蔵書八千余冊も経済地理学の和洋書をひろく集め異彩であった。

最後に図書館の特別集書として三田文学ライブラリーの設立がある。四十一年雑誌「三田文学」が永らく休刊されていたのが、復活されたのを期に、作家久保田万太郎の寄附した著作権によって、塾内に日本の近代文学研究を盛りあげようとする運動が起された。講座の開始や出版物の発行と共に、三田文学関係の作家の文庫を造り、図書館内に置こうとするものである。三田作家の初版本・原稿・ノート・色紙・書翰類を集め、三田文学及び近代日本文学研究者の便に供しようとした。これは久保田万太郎記念資金委員会によって発起されたものであるが、同会の会長として発起人の一人である佐藤朔がすすんで図書館内にそれを設けたのには、留学中、仏蘭西のサント・ジュヌヴィエール図書館内にあるジャック・ドゥセ文庫を見学し、そこに収集されたフランス近代文学者のおびただしい文献の山に驚き、羨望したからに外なるまい。計画は四十一年春に初り、八月発足した。場所は戦前鏡花室を設けようとした図書館八角塔の二、三階をあてた。こうした収集は一朝一夕では出来ない。こつこつ集められ、何時の日にか日本近代文学研究には欠かせない文庫となるであらう。

なおこの期の図書購入に二つの補助金が文部省より助成されたことを付加えよう。一つは四十二年よりの私立大学理科等教育設備整備費補助金であり、他は四十三年よりの私立大学教育研究費補助金であった。前者は従前は理科系学生の実験のための機械器具および校具にかかる補助であったのを、文科系大学の学習用和漢図書にも拡大されたものであり、後者は私学の研究教育の振興と経営の保護のためであった。共にその事務処理は繁雑を極めたが図書の充実に好結果をきたした。

学生自治会の団体交渉的要望は高村館長時代から初まって、前原時代を通じ益々頻発して行った。交渉項目は貸出時間・貸出期間・貸出冊数・書庫内検索など、あいかわらずの要求であって、貸出期間・冊数は漸時エスカレートする傾向にあったが、書庫内の検索についての修士学生の要望は最後まで実現せずに終わった。それは貴重書の限界が不明瞭で、書庫内に紛失したくない貴重と考えられる図書が、まだ多分に配架されていた。それらを整備しての上でないと開放出来ないと答えた。学生自治会の要望は四十三年度には学生生活動家の運動の活発化という背景もあって、強硬になって行った。

医学研究費に米軍の援助があることに對する反対に端を發した塾内の学生運動は、四十三年九月全学連の塾監局占拠、文斗連の教務部占拠、社学同の医学部中央事務局占拠が行われ、通信自治会による通信事務室占拠も発生した。学内各所に学生は立籠ったが、図書館のみは平生通り開館し続けた。もっとも日吉図書館は学生の封鎖にあつて閉館された。翌四十四年四月法学部学生五名から書面で要望書が届いた。年中無休を原則とし、休みは大晦日と正月三ヶ日に限ること、そして閉館時間は日曜・休暇を問わず年中午後九時にされたしという法外なものであった。学期始め

なので学生運動の塾内における動向はまだ掴めなかったが、噂は噂を呼び不安定であった。要望学生に対しては人員の不足を理由に拒わったが、それに対しどう反駁が来るかわからぬうちに、同年六月館長の更迭を迎えた。

六 研究・教育情報センター計画

佐藤館長の図書館における最大の業績である研究・教育情報センター確立への道程を、ここでは語る。それは図書館には新図書館計画委員会があり、研究室には研究室建設計画委員会が出来、更らに学校当局にもその主旨によって研究・教育計画委員会が出来た。それぞれが自らだけの問題でなく、お互に錯綜しあう問題を各別に討議していた。したがって図書館側の意向を貫くには他の二つの委員会を説得しなければならぬ。そして種々な経緯を経て、図書館と研究室を一九とす情報センターの確立を成功させたのであった。それを順序だてて詳説しよう。

先づ佐藤館長は初めからこの構想を持っていたのではなかった。第二次高村塾長の下で学務理事であった頃は、当面の問題として新研究室の建設が急がれた。第一校舎の上に仮りに立てられた研究室では教員の満足を得ることが出来なかつたので、本格的な建物を早急に造らねばならない。そこで審査室の岡本章に命じて、新研究室建設構想をつくらしめた。岡本は三十九年十一月諮問をうけて、一橋大学その他の大学研究室を参観したりして検討を重ね、十二月岡本案を提出した。それは現在の三田情報センターのある地区で、第一校舎と研究室とを結ぶ廊下を考え、内部は書庫を真中に置いて、周囲に研究者の個室を配置するよう考えられた。図書館はその完成後、背後に教育用図書館をつくる。そして今迄のは一部展示用に使ったり、記念館の図書館として保存する。教育用図書館が出来るまでの一時

措置としては、南校舎のピロティを図書室に改造する、という構想であった。しかしこれらは何も手がかないうちに、高村塾長は辞任し、佐藤理事の計画は次の代の理事に引渡された。

永沢塾長の下では石川忠雄が学務理事になり、佐藤は図書館長になった。図書館には新図書館計画委員会があった。新しい図書館の建設を目論見ていたが、この頃の同会はその意図する方向に充分な力を出しているとは言えなかった。七月一日に開かれた企劃委員会の討議は、前原時代夏期二回に涉って開かれた図書を取扱う職員の研修会を今年も開くか否やの問題であった。それも前原館長末期に討議された二番煎じで、研修会の効果は一応認められるが、同じ形式の存続では職員の共感は得られないとし、図書館学科への研修に切り替えられるという、いわば末梢的な議題が論じられていた。

ところが佐藤理事から石川理事へ引継がれた新研究室の建設計画は着々具体化して、八月には、近く三田研究室建設計画委員会が出来、教員が委員となり、三千坪で地上四階地下二階の建築が建つであろうとの噂が入り、次でそれを裏付けるかのように研究室運営委員長高島正夫、同資料室委員長黒川俊雄、同主事笠野滋の連名で、九月に官報や新聞紙、マイクロなどを二年間図書館に移管したいとの交渉があった。研究室の建設は速やかに着手されているように見えるが、新図書館の方は挫折感が濃い。そこで十月には新図書館計画関係者の懇談会が持たれ、図書館と図書館学科の主な人々が会して、新図書館計画委員会の今迄の方針を再確認した。即ち図書館と研究室とを一体とし、図書館センターと呼ぶものの構想である。

四十年十二月三田研究室建設計画委員会の委員が依嘱され、第一回会合は翌四十一年一月二十一日に行われた。そ

れに対抗して新図書館計画委員会では基本構想をはっきり打出す必要があるとして、急に活動がはげしくなり、図書館副館長である石川・高橋・外山に加うるに図書館学科の藤川・沢本両教授が情報検索手段委員会（I・R・S）を作って盛んな討議を重ねることになった。この二本の並行的路線の外に、前述したように学校当局の研究・教育計画委員会設置の発表があり、多数の教員を委員とし、その審議によって義塾創立百年以後の新しい指導理念と体制の探求にとりかかった。こうした討議は私立大学の経済的困難よりくる経営の危機感から発するもので、ひとり慶應のみ発想ではなかったが、慶應では四十年十月二十八日に第一回の会合が開かれ、佐藤朔が委員長に選ばれた。元より長期の目標に向って、研究・教育体制の理想像を画かんとするものであるが、現におこりつつある計画も討議されねばならない。とすると三田の研究室をどうするかもすぐ問題となる処である。

図書館と研究室とは野村館長時代に疎隔されて行く状態にあったとは既述した。その後高村・前原両館長は研究室の図書委員長とは緊密な連絡をとり、主事も田中市郎衛門から山口清重に変わって、図書館との関係も改良されて行った。殊に前原時代の夏期行われた研修会によって、両者に働く人々の交歓が出来て理解を深めたことは確かである。しかし図書館の方が成立年代が古いだけあって、比較的整備されており、また館長の統率も利いて纏まっていたのに対し、研究室は新しく、しかも図書館的訓練に不足している人々が多く、各学部別に統率されていたから分散的であった。けれどもそれなりに良い面もあって、例えば利用者、即ち教員と密着していて活気があった。一方は伝統的なものがあり、他方には新鮮さがあった。山口が退任して笠野が主事になったのは、研究室も図書館的訓練を持った者が運営する方が効果があるろうと、学校当局が判断したからであろう。同時に研究室職員にも図書館学科出身者

を多く採用した。図書館から笠野が転出され、図書館と研究室との間の連絡は充分採れるようになったかという点、そうではなかった。それは教員の間には図書館不信感があつて、笠野の力ではどうにもならなかつたのであろう。専ら笠野は図書館とは別個の新研究室建設に挺身した。

三田研究室建設委員会は四十一年二月第一回の会合を持ち、二回三回と回を重ねるうち、建物の内部構造の設計が具体化して来た。そして四月から研究室の教員使用のスペースの討議に入り、教員自身の問題なので白熱化し、各学部間でスペースの分捕り合戦の様相を呈した。それが決着したのは六月である。次で七月から研究室の管理組織に関する小委員会が持たれ、その答申は九月三十日に出されて委員会は解散した。研究室の委員会は建設を予定される設計図を前にしての具体的討議であつたのに対し、新図書館の I R S 委員会の方は、図書館と研究室とを含めた研究教育センターのビジョンの討議である。センターの具備すべき機能はどうあるべきか、図書情報の掘き方、それに電子計算機をどう使うか、管理組織はどうあるべきかなどであつた。

研究室は第一期と第二期とに別れて建設の予定で、西側から始まって図書館に接近するのは後になる。そこで第二期工事の着工前に図書館側の具体的構想をまとめて置く必要がある。その検討の要請を館長からうけたのは、研究所の所要スペースの決定時期の六月である。図書館と研究室図書集中整理の方法、それに伴う図書館と研究室をつなぐ懸け橋の付設場所、整理事務室、複写室などの所要面積などが、新図書館計画委員会で研究された。

こうした新図書館側の動きに対して石川学務理事からは採用するとか、しないとかの確たる言質はまだ得られなかつた。ただ基本構想があらば長期計画として採り上げられようと曖昧に言われるだけであつた。佐藤館長の任期は四

十一年九月に切れたが再選された。館長は改めて各課別に館員に会い、その抱負を述べると共に、その課の仕事上の悩みを聞いた。捲土重来を期し意欲充分であったが、新図計画を研究室計画と調和しうるかは、不安定であった。石川副館長には万一計画が出来ざる場合、壮大なる研究室の建物から取り残された図書館を、どう運営すべきかを諮問し、石川は図書館の部課長に諮って図書館改善拡充試案をまとめて提出した。

他方、新図書館計画委員会は塾内の情況から判断して改称することになり、四十二年一月研究・教育情報センター委員会となった。そしてその中に実行委員会・企劃委員会、それに専門分科会として利用と管理の両分科会があり、それぞれ委員が依囑された。それらの会の庶務は図書館内に置かれた事務局が掌る。この構成は大体新図書館計画のときと同じである。実行委員会の諮問機関である企劃委員会が活動の中心を形作る。委員は文学部教授印東太郎、図書館学科教授藤川正信、副館長石川博道、医学図書館総務部長心得津田良成の四名で、事務局主任は図書館総務課係主任の毛利信吾がなった。名前の改称は新図側では図書館センターと呼び、新研側では研究センターと唱え、何か混同され易く感じられたので、イメエジ・チェンジの必要があった。そして人を惹きつけるような名称をということで、情報という文字が採られ、研究・教育情報センターとなった。新センター委員会が発足して討議されたことは総合目録作成のための目録記入の統一達成、教員に対するレファレンス・サービスであり、教員がどの様なサービスを希望しているかを知るために、文献情報利用のアンケートを求めた。

四十二年十二月、以上のような情報センター委員会が屢々会合されている間にも、研究室の第一期工事は着々進捗しており、図書の整理計画や総合目録の作成計画やらが、それに伴って研究室側でも練られていて、情報センター側

を焦ださせた。まだ実態を踏まえている研究室側のペースが優勢であるように見えた。それが稍々明るい希望が情報センター側に見えたのは、研究・教育計画委員会の研究体制の答申の中で取り上げられたことである。四十三年一月二十九日教授生田正輝を主査とする第三分科会の答申で、研究組織及び研究を直接補助する事務組織を近代化し、研究室、研究図書館の運営の能率化を計るべきであるとし、その細部は研究・教育情報センター委員会の検討に委ねたいと言っている。

それが同年三月の総まとめである答申においては、第三分科会の答申が再確認された上、次のように力説した。図書館・研究室などの研究施設は、できうる限り一元的に管理され、運営は近代化・能率化が望まれること、研究・教育情報センターを確立して、その中で研究情報活動が積極化され、研究設備の拡充も行われ、学内の研究施設の緊密な連繋、同時に学外、海外の研究機関との連携強化をすべきであるとした。前述のように研究・教育計画委員会の委員長は佐藤館長兼務であったから、この委員会へ、情報センター委員会の理念・構想は絶えず流されており、必要ある場合は藤川・沢本委員を出席させ、現状説明にはより詳細なデータを提供するなどの努力の積み重ねが、この結論を生んだわけである。当初、新研究室構想で頭が一ぱいであり、新図書館計画にまで考えが廻らなかつた石川学務理事も、情報センター構想に賛意を表し初め、四十三年二月には事務局の強化を提案し、接衝のあげく審査室の孫福弘が加わった。五月には「研究・教育情報センターの構想」なる印刷物を発表し、永沢塾長も研究・教育のための環境の充実をはかるといふ基本的姿勢を汲みとって、協力するよう教職員に呼びかけた。

六月塾長は研究室運営委員長より申入れのあつた研究室の複写設備の拡大大要求に対し、情報センターで全塾的観点

から考えるよう要望があり、同時に三田における図書資料の収集・運営に係わる諸問題をも解決するよう期待された。こうした具体的問題に取り組むために三田特別委員会が作られた。構成員は研究室の運営及び図書委員長ら十三名、研究所主事一名、図書館学科教授三名、図書館員三名と実行委員長佐藤の二十名であった。図書館の三名は石川・伊東に、四十二年米回国留学から帰朝した渋川が新知識を買われて参加し、主として渋川の立案する計画案を検討し、十月三十日答申した。複写の問題にしろ、図書の収集・運営の問題にしろ、研究室と図書館とを一体として運営しようとするセンター構想には、教員側に強い反撥があった。教員は研究室の現体制を保全する希望が強く、一本化は困難であった。そこで移行措置として研究室の自主性を尊重し、収集・受入・整理のプロセッシング・センター以外は現状のままということで妥協した。妥協の合意に達するまでも、小委員会を作って頻繁に会合を重ねる必要があり、そうすることによってセンター構想の真意を、教員側にも理解させ得たと言える。

情報センターの大筋が決定したので、愈々移行準備のため、四十四年一月、事務局が強化されて準備事務局となった。三月には名称が改められて準備本部となり、四月その人事が定まった。準備本部長は佐藤館長が兼任し、本部長付に石川博道、津田良成、栗本省吾（研究室主事）長沢雅男（図書館学科助教授）事務主任には福留孝夫が医学図書館から転任して来た。そして同年十月を目途に準備活動を初めた。

ところがこの段階で準備本部の計画に対して図書館員から反駁が出た。石川副館長は本部長付であり、計画決定に参劃すると共に、図書館側への説明とその納得をとり付ける役割を持つものであったが、副館長が本部から図書館に戻って説明するところによると、突然に現われる新事態が数々あった。その主なるものは本部では部課長制を廃止し

て、チームリーダー制を採用し、そして後々専門職制を導入するという。これに対して図書館側では専門職制をスタートさせてから、部課長制を廃止すべきであるとした。部課長制を廃止して、すぐ専門職制が出来るとは考えられない。慶應義塾の給与体系からはみ出した制度は後においてき堀にされ兼ねないと思惟された。図書館の部課長制の廃止は一つのビジョンであるにしてもこの段階では時期尚早と思われる。も一つは三田研究教育情報センターが出来ると共に図書館は消滅するという。但し研究室は教員の反対によって存続するという。これは寝耳に水といった観があった。四十四年十月の三田特別委員会でも決された答申によれば、選定されたる図書はプロセスセンターを通して、総合研究図書館、学習図書館、各専門別研究図書資料室へ流される筈であった。本部会は図書館員の意見の反映が不十分であるように思えた。こうした動きに館長は心配して、本部会に図書館と研究室の部課長を加えるよう提案して、実行されたのは五月中途である。そして図書館側と

本部との調整は間もなくついた。

六月佐藤館長は塾長になったが、慶應義塾研究・教育情報センターへの出発は、ともかく路線が定められるまでこぎつけて退任したというべきで



三田情報センター

図書館と研究室棟、廊下をもって結ばれている。

あろう。学務理事のときは新研究室の実現に努力したが、間もなく図書館長となり、館長としての立場から眺めると、新研究室だけの建物というのには厭き足らず、新図書館計画委員会を足場に全慶應内の図書政策の中で、その場合に努力した。そしてこの計画を是非とも実現させるべきだとの確信は、四十二年四月から五月にかけてのアメリカ旅行によって、さらに深められた。この時はミシガン州立大学百五十年記念式典へ、塾長代理として出席するのが目的であったが、その後、各地の大学図書館を視察し、新図書館構想に対する示唆を数々うけたのであった。しかし何分にも新しく研究室の建物を作るというのは永年の懸案であり、多数の教員の支持するところであったので、館長を初めとするその委員会の努力はやっと一歩前進したかと思えば、また後退するという風で、遅々とした歩みであったが、先づ塾長・理事らを納得させ、次で教員達の理解をとりつけ、最後に図書館内部の不平をも鎮めて基礎を固めたと言えよう。佐藤館長は終始図書館学科(この期の中途から図書館情報学科と名称を改めた)と緊密な連絡を保ち、永い努力の末の成功であった。その奮闘は正に三面六臂といった観があり、窮地に立つかに見えながら、最後には果すべき役割を適格に割付けた手腕は見事と言えた。努力をおします、気軽に学校当局へも働きかける、そうした点を石川副館長は常々徳としていた。五月二十一日、塾長候補詮衡委員会で候補者が佐藤一人にしほられ、塾長推薦がほぼ確実になったその日、佐藤館長は館長室のデスクを片付けた。それを手伝って部屋を出た石川は、執務日誌に「良いそして立派な館長であった」と記した。

七 高鳥正夫館長の就任

佐藤館長の手によって図書館と研究室が纏められ、研究教育情報センターの発足への見透しが立った。もっとも頭初考えていたような完全な一体化ではなく、研究室管理は別だてに、研究室図書を選定は教員によって構成された図書委員会にまかされ、研究室に関する限り、その選定された図書を整理し、運用し、保管することが情報センターの責任の下におかれる。これが大綱である。図書館は情報センターの中に溶け込む。影も形もなくなって、生硬な、耳慣れない情報センターという名称に変わる。其処に図書館に永年籍を置いた人の不満がある。図書館と研究室とが合同されて一つの組織になるといふことは、年来の理想とされ希望することであった。ところが教員側の希望はかなえられて研究室は残され、図書館だけが消えるというのは、何となく割り切れない。研究室が残るなら、図書館も残るべきだと考え勝ちである。しかし発表された直後の昂奮が収まると、もともと統一体を希望していたのではないか、研究室が残ったとして、理想に一步近づいたわけではないか、と反省され、佐藤館長のその構想は大体納得された。こうした最中に館長の更迭が行われた。

恒例によって商議会が開かれるわけであるが、今回は上述のような機構改革への中途の更迭であるので、誰れに決まるかによって、その成行きに重大な影響を及ぼす。当局側の推薦者銓考は慎重に考えられた末のことと思われる。六月十六日の商議会において推薦されたのは、法学部教授高島正夫一名であった。商議員側においても図書館と研究室との問題の重要性は良く認識されており、その上、学生紛争の最中にある時点において、当局への協力の必要から投票という手段によることなく、殆んどが賛意を表した。たゞ一人、法学部からの商議員平良が教授会に諮らねばきめられないと、解答を留保した。しかし高島就任決定はそれから問もなくであった。



高鳥正夫

高鳥新館長は大正十一年新潟県長岡に生れた。慶應の法学部法律学科を卒業し、商法特に会社法に詳しく、学位をとった。高鳥はごく最近まで研究室運営委員長をつとめて、研究室の事情に明かるく、かたがた図書館との合併の折衝にも参加していたので、これ迄の経緯を知悉していた。加うるに四十八歳という若さは、学内の紛争にも身軽るに对処し得るものと期待されたのであろう。

館長の先づ当面する仕事は情報センターの発足の準備であつた。

佐藤前館長構想の情報センターは準備本部が出来て、その発足への準備は着々進んではいたが、まだ全部固まつたとは言えない。図書館内にも、研究室の事務側にもくすぶつた不満が存在し、教員の間にも図書館の名の無くなるのを怖れる人もあり、消えるのを寂しがる年配者もいた。情報という文字に抵抗を感ずるといふ人もいると言う風に、まだ事の次第によっては荒れる心配もあつた。これらを如何に滑らかに三田情報センターにとけ込ませるかが、手腕の見せ処であつた。

他方、学生の学園内の紛争はその目標を次々と変化させて、激しさを加えて行くようであつた。学期初めの四月頃より沖繩闘争支援、或は大学立法反対と称して、各学部の学生大会が次々と開かれ、スト強行への実力行使を虎視眈々と狙っていた。そして新館長出現の六月の末には、日吉キャンパスに大規模なバリケードが築かれ、ストライキに入つた。これがため日吉図書館は閉鎖され、出納手の一部は三田の図書館の仕事を手伝つた。いつ何ん時、学生の校

舎占拠が三田へ波及するかわからない。その際、四十三年のときの様に図書館はその圏外であり得ようか。学生が頻繁に利用する図書館は学生自身の利益のためにも、占拠はしないでであろうとの考えは希望的観測であって、学生側からの保証は何もない。激動下の学園内にあつて、伝統の図書館を如何に守るかも、新館長に期待されるころのものであつた。

館長就任の翌七月、法学部修士学生五名から佐藤塾長宛に、質問書が郵送された。佐藤館長時代に休館日の減少と平日の閲覧時間の延長とを求めたとき、館員の増加が認められない限り実行出来ない。目下の塾の財政ではその増員は無理であるとの拒絶回答を出した。そのときと同一の学生達である。彼らが再び質問するところは塾長の座にいたならば、図書館の増員の工夫が出来るであろう。速やかに要求を実行されたいという趣旨のものであつた。ところが、塾の財政事情は昨年と同様であつて、たとえ塾長の地位にあつても、他との均衡を破つて一つの職場の増員は出来ない。拒絶するより仕方がない。しかし他方、学内の紛争は日吉から三田へエスカレートする状態にあつた。七月八日南校舎二階が文闘委を中心とする学生に占拠された。そこで法学部修士の一部の学生の要求であつても、無視すれば更らに大きな波紋を呼ぶとも限らない。そこに学校及び図書館当局の苦悩があつた。結局、さし当てる夏の開館にしぼつて処理することになった。夏期は例年であると、休暇中に通信教育部のスクーリングがある。前半は体育課程履修の必要から、日吉校舎で行われ、後半は三田で行われる。そこで前半は三田の図書館は正午閉館で、後半だけが月水金が七時、火木土が正午閉館である。正午閉館の日を何とか後半の月水金なみの七時閉館に出来ないものか。幸か不幸か、この年は日吉校舎は封鎖されて使えないので、全部を三田で賄うことになった。休暇中の火木土を

七時とすれば足りる。そこで専任者の増加なくして開らせる工夫がなされ、新日本ビルサービス株式会社に要員を依頼することになった。全くの門外漢が配員されるので、その間は圖書の貸出は停止する。閲覧室だけを解放し、その他の通路は扉を閉ざして出入させない。これで要求学生の同意が得られた。彼らは司法試験のための勉強が目的であったので、閲覧室が開いているということも満足したのである。図書館にとってビル・サービスの要員使用ということは、必ずしも初めてではなかったが、専任者の増員が不可能に近い状態にあり、又時間外勤務の強制も出来かねる場合、その利用は此の後、何かと便利に使われた。

準備本部会はこの時期も続けられていた。情報センター組織機構が論ぜられ、規程の作成が急がれた。そうした八月七日の本部会において、高鳥館長は図書館の名称を図書収集の機能面で残すと発言した。永い間に集積された図書館の蔵書の特徴を今後も生かすため、図書館員の選書スタッフを活用して行くことである。新研究室の書庫棟には各学部の図書委員会によって選書された図書を収蔵し、図書館には図書館図書選定委員会によって選ばれた図書を追増して行く。研究室の図書は教員によって選ばれるから、当該教員の専門書は周倒に集められるであろうが、図書館の場合はより広い視野から収集し得る。目前の研究にこだわらず、先きを見越した収書もなし得るという便宜もある。更らには高価にして稀覯な図書も選定し得るかも知れない。他方、こうして図書館の名を残すということ、不満を内に秘めた図書館員の心を和げるに多少の効果を望み得たかも知れない。これは情報センター準備委員会の賛成をも得て実現された。

七月二十一日夏期通信教育部のスクーリングの開始によって、履修学生が全国から集まって来る時期に、闘争学生

の活動はエスカレートし始めた。八月八日未明、三田では第一校舎、西校舎、新研究室及び通信教育事務局にヘルムット姿の学生が侵入し、封鎖を開始した。けれども永く占拠され続けたのは新研究室であった。新研究室は図書館に隣接し、架橋によって連絡されていた。まだ研究室建設工事は完了されていなかったため、扉は閉ざされ往来は出来なかつたが、図書館の閲覧事務室の窓の外側までは来る事が出来て、そこにアジ・ピラが貼られることもあった。新研究室の占拠は図書館にとって近火といえる。さらに紛争は学生をして益々暴力化せしめ、内ゲバによる傷害、職員を負傷、さらに八月二十日には通信教育の中鉢正美部長がヘルムット学生に拉致され、負傷するという事件などが重なり、占拠も塾長の再三の告示を無視して、第一校舎・西校舎へと波及した。そして九月七日には中鉢部長への傷害事件取調べのため、警視庁の強制調査が行われた。その日、当分の間、教職員及び許可された者以外の校内立入り禁止の措置が掲示され、塾長は「学生諸君に告ぐ」の緊急声明を発表した。

九月八日、立入禁止の掲示は無視され、他大学の学生を含む、多数の武装学生が構内に乱入し、教職員を威嚇し、全施設の再封鎖を宣言し、徹底的破壊を叫んだ。塾長はマイクで学生に退去を呼びかけ、それに全く応ずる気配も見えないことを知ると、初めて警察力を導入させてその排除が行われた。この日は立入禁止であつたので、図書館は八日より十一日まで事前に休館されていた。九月十一日、塾長の所信表明の集会在日吉ラグビー運動場で行われたが、紛争学生の納得するところとならず、却って警察の導入に反撥した全共闘の学生は、三田の再封鎖、図書館の占拠を企て、日吉では立看板にその旨を記して意思表示した。この頃が最も緊迫した時期であつた。

学内紛争には図書館の部課長は馳り出されて、他の職場の役職者と共に、毎度超過勤務乃至校内に宿泊して、学生

の動きを警戒していたが、この頃は屈強なる男の職員は皆刈出されて警備した。特に図書館の安全は館員に限らず憂慮された処で、教員は学生を説得し、館員は万一を思慮かつて、書庫の窓に鉄棒を取付けたり、更らに玄関の広間にあったカード目録台を二階に移し、八角塔は目標となりやすいことから、中にある三田文学ライブラリーの図書・備品のすべてを書庫内に移転した。書庫は鉄扉によって閉ざされ、生半荷のドリルではこわされないと判断したのである。九月十五日から十七日にかけて図書館は再度の休館をした。

九月十六日、約百名のヘルメット学生が再び一団となって南校舎に乱入し、教員・学生を無理に押し出し、封鎖し始めた。ところがその直後、西校舎内の学生団体ルームから火災が起り、消防自動車 came。火は間もなく消されたが、自動車のサイレンの響に驚いて、封鎖学生はあわてて退散した。なお火災現場からは火焰ビン製作中と考えられる証拠物件が見つかった。三田ではこの日が山であった。後は授業妨害などは頻発したが、校舎の占拠は行われなくなり、図書館の休館も全国全共闘総決起大会が慶應校内で行われると予定された十二月十九日、当日限り行われただけである。全共闘大会は学内の立入禁止措置によって行われなかった。

こうした八月から九月にかけての激しい学内騒擾は、教職員の注意をそれにそがせ、奔命に疲らせた。来る日も来る日も紛争に身をさらし、話題もそれに限られる。情報センターへの不平不満は紛争にまぎらかされた事も確かにあろう。論議の多い教員達もいつの間にか、情報センターの成立に異議を唱えなくなった。滑らかに終点へ近づきつつあったのである。十一月新研究室全館が完成された。そこで翌四十五年四月三田情報センターが正式に発足される段取りも決った。十一月から翌年一月にかけて、情報センター人事の内交渉も図書館・研究室の双方に行われた。

図書館から情報センター移行の最後の数ヶ月の間に、突然起ったのは図書館の臨時アルバイトの解雇に端を發した紛争である。図書館の複写事務はゼロックス開設当初から、予想以上の繁忙を重ねたので、館員のみ作業では間に合わず、臨時のアルバイトを雇って凌いで来たが、そのうちの一員が無断欠勤が多いため、解約せざるを得なかった。たまたま当該アルバイトは通信教育部の在学生であったため、通信教育闘争委員会の学生が解雇撤回を求め、図書館前には立看板を、館内の複写センター前の廊下や階段にはアジ・ピラを貼り、繰返し抗議の集会や坐り込みが行われた。既述のように学内の紛争は九月ごろから下降線をたどっていた。十一月の佐藤首相訪米阻止、一月の三里塚空港建設抗議という風に、学外闘争へと台風の目は移りつつあった。そうした状況下での図書館の紛争の長期化は憂うべきことと思えたが、幸い学期末試験も終了して、学園から一般学生が姿を消したので、この就労闘争も先細りですつとはなく終了した。

十一月十日完成した研究室棟は図書館と架橋を以て連絡され、西から東へ永く延びていた。建築面積四八六・八八坪、延面積四、二八〇・九二坪。鉄筋コンクリート造地下二階、地上七階に塔屋二階建の宏壮なものである。このうち東の方、図書館に近い部分は書庫棟といって、情報センターの管理下におかれる。(建築面積一〇五坪、延面積六七四坪)ここに情報センター事務室と研究室書庫が収まる。四十五年三月二日、図書館の整理部は解体され、新編成の総務課、テクニカル・サービス部収書課・整理課となつて、新研究室内の一階と三階に移転した。そして収書課と整理課は準備本部の波川雅俊と洋書課の柳屋良博とが作るころのマニユアルに従つて作業を初めた。三月二十三日には図書館最後の商議會が開かれた。二十七日にはこれも最後の図書館部課長会、夕方には情報センター披露祝賀会、三

十日には図書館全員による図書館さよならパーティが催された。図書館は建物と蔵書と館長と副館長と、その召集による図書選定委員会のみを残して消滅した。最早そこには図書館という組織はない。

最後に昭和四十五年三月末の図書館現況を示して置きたい。

図書館員数四十三名(男三十二名、女十一名)

館長 高島正夫

副館長兼整理部長 石川博道

総務課 岡野盛繁(係主任)、毛利信吉(係主任) 熊沢寿美子、加藤すみ子、太田臨一郎

和漢書課 堀田信夫(課長) 永井季子、天田尚子、中島和子、白石 克

洋書課 柳屋良博(課長) 熊田延枝、東田全義、金森恭子、菅野千枝子

運用部長兼閲覧課長 伊東弥之助

閲覧課 碓井義美(係主任)、秋山実(係主任) 衣川専一、水口英子、生田直、森園繁(留学中)

参考課 丸山信(課長) 朝倉幸子、須田昭五郎

定刊課 笠野滋(課長) 奥泉栄三郎、大岡英太郎

この外出納手十一名、用務員二名

蔵書数 五一五、四一三冊(和漢書三五二、〇四七冊 洋書一六三、三六六冊)

マイクロ・フィルム 一、〇六二リール(和三九二リール 洋六七〇リール)

雑誌種類 五、〇二二種(和三、六二四種 洋一、三九七種)

新聞数 六六種(国内四一種 国外二五種) 内保存一三種

七 高島正夫館長の就任

第六章 この十五年

開架図書数 一三、七二三冊（和一、八〇〇冊 洋一、九二三冊）

レファレンス室 図書冊数四、〇九九冊 参考質問数三、〇九五

開架雑誌数 二九三種（和二四一種 洋五二種）

四十四年度閲覧状況

開館日数 二七八日

館外貸出 請求者数一七、〇九八名 貸出冊数一八、六五八冊

文献複写 マイクロフィルム ゼロックス

申込件数 三六件 二九、一一一件

枚数 五、三七ニコマ 二七〇、六一八枚

おわりに

慶應義塾図書館史は昭和四十五年三月を以て一応終りとした。ここまでも義塾創立から数えて百十二年を経て、まだ図書館はなく、図書室ともいうべきものすらなかった創始の時代から筆を起して、これまでに至った。今、ふりかえって見ると、自づとそこに時代時代の図書館の特徴が浮び上って来ているのに気付く。最初のうちは創立者福沢の書齋が図書室のようなものであった。次いで福沢の努力によって教科書貸与を中心とした図書室になった。それから文庫を持つとする努力の時代があった。そして小規模な書館が出来て運営される。次で欧米の図書館を利用した人の指揮による大学図書館の建設が初まる。そして大学の心臓たらしめるために蔵書構成の充実に腐心された。さらに極く最近では収書努力よりも、如何に図書館を利用すべきか。利用者本位の図書館に力がそがれる。勿論、以上のようなことは時を明確に区切って行われたのではないことは言を俟たない。

独立棟の赤煉瓦の図書館が出来てからの記述は、それは図書館の本史に相当するが、その期間、館長の力の入れるところは前半と後半とでは大きな相違がある。田中一貞監督から野村兼太郎館長までは大体、館長は良き収書へ懸命の努力をした。ところが前原光雄館長以降はややおもむきを異にし、利用に重点を置いている。高村象平館長はその中間期に当るといふべきであろう。収書というも利用というも、それは図書館の両翼であって欠かすことの出来ないものであることはいふまでもない。ただ、どちらかに、より重点を置くかだけである。そしてそれは図書館の長である館長の意思によって左右されるが、時代の背景、社会の背景に影響される方が大きいことも忘れてはならない。